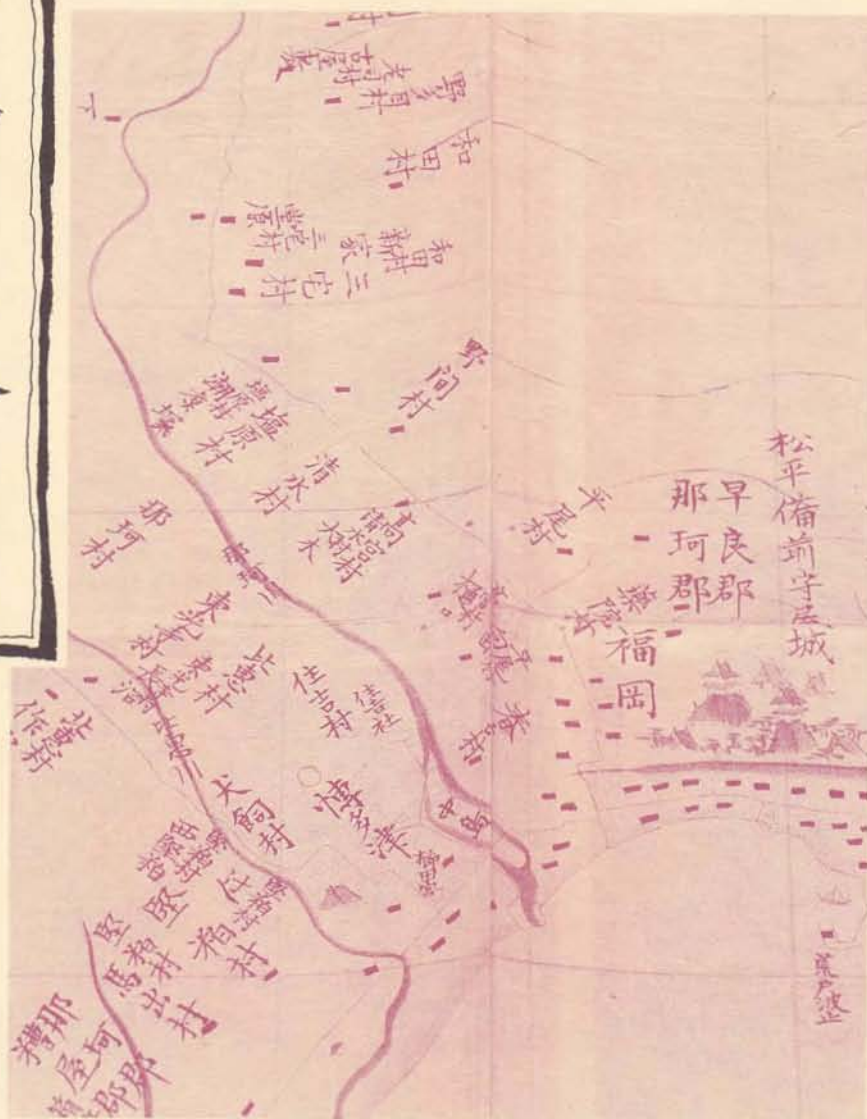


史料と伊能図

# 伊能忠敬

研究

二〇〇四年 第三五号



伊能忠敬研究会

# 表紙図解説

米国議会図書館蔵

伊能大図 一八七号の部分「福岡」付近

第八次測量で計測された福岡周辺である。本図では福岡城の景観が大規模に描かれ、周囲の主要道が網羅されている。いまも昔も同じ字を書く那珂川を挟んで、左岸に城下町の福岡があり、右岸は町人町の博多津と記されている。その中間に中島とあるのが、有名な現在の中洲である。一部に中島という地名も残っている。当時は各地にあつた河中の砂州に中島という地名をつけた所は多い。福岡城の北には大濠と思われる大きな水路を描く。博多祇園山笠で名高い櫛田神社が小さく描かれている。博多津というが、湊の印はなく福岡側にある。住吉社の位置は現在とは少し違うようである。

福岡領には都合三回入境したが、浦方の下役として国学者・青柳種信が付き廻った。国学や地理に造詣深く大変信用されたという。

(題字は伊能忠敬の筆跡)

注・今号の表紙図は南北を逆になっています。

(渡辺)

## 最新情報

目次

35号

「アメリカ伊能大図展」開幕と記念誌の出版

平成地図御用所から

忠敬の年賀状

柏木乙右衛門家先祖「無覚」とは

エッセー 続ハルビンにて「師兼留学生」の記

芳名録より

伊能忠敬と明治の海軍軍人

研究ノート

伊能古文書教室『旌門金鏡類録』(二)

外国の文献のなかの忠敬先生

伊能忠敬と菅茶山の会談について

「加賀藩測量二百年」の年を終えて

忠敬の持病と妙薫の卵

トビックス

研究会主催「江戸開府四百年記念講演会」

これぞ墓碑銘拓本

新春の注連縄

「林蔵祭」茨城県伊奈町で開催

測量図の出版意図示す書簡

記念館収蔵品展示から

干支を訪ねて・申年に因んだ地名

地域史料紹介 伊能忠誨日記(四)

支部便り「長崎市立博物館」に伊能図を見る記

忠敬談話室だより・お知らせ

渡辺 一郎 一

編集部 四

藤岡 健夫 八

佐久間達夫 一六

岩城 元 一〇

伊能 陽子 二〇

小林 清 二一

小島 一仁 二二

秋間 実 二七

菅波 寛 三二

河崎 倫代 三四

杉浦 守邦 四一

編集部 一九

植田 浩一 二六

大友 正道 二六

編集部 四〇

日経 新聞 五八

伊能記念館 六一

齋藤 仁 六三

佐久間達夫 五〇

野田 茂生 六〇

編集部 六二

## 「アメリカ伊能大図展」開幕と記念誌の出版

—フランスのペイレ中図も迎えて—

渡辺 一郎

いよいよ本年は、アメリカ伊能大図展が開催されます。この展示会は、二〇〇一年春に発見されたアメリカ議会図書館所蔵の伊能大図模写本を中心とし、あわせてフランス人イブ・ペイレ博士所蔵の伊能中図の里帰り公開を主な目的とする、伊能図と伊能忠敬についての展示会です。

展示内容は、アメリカ議会図書館所蔵の大図と、イブ・ペイレ氏蔵中図の実物による博物館展と、アメリカ大図の原寸大彩色複製図を床面に接合展示し、地図上を歩きながら、伊能大図のスケールの壮大さを実感できるようにしたフロア展の二本立てとなっています。

本展に先立って東京国立博物館で開催された「伊能忠敬と日本図」展に、フロア展用に制作していた複製大図の一部が公開されたが、博物館所蔵伊能図の全面公開とも相まって、多大な人気を集め入場者数は一三二、五八八名に達しました。五年前に東博展同様に、研究会が深くかわって開催された江戸博の伊能忠敬展の入場者一一一、三九九名を大きく上廻りました。

アメリカ大図の実物展は一段と人気を集めるものと推測されます。

この展示では、できるだけ多数の大図を公開展示できるようつとめましたが、資料保存の立場からアメリカ側が厳しい制約条件を課しており、一時は断念か、との意見もあつたくらいでした。したがって、数量を限定せざるを得なかった事情もあつて、博物館展示では各館の所在地周辺を中心として八枚を展示することになりました。各館の展示図は重ならないようにしているので、全体としては三二枚の大図を展示することになります。

以上はアメリカ伊能大図現物の日本への里帰りのお話ですが、全アメリカ大図のデジタルデータは、国土地理院の努力で、すでに国内へ入手済みであります。それにもとづいて、無着色図一六九枚への着色も、伊能洋チームの奮闘で、すでに完了しております。このなかから東京国立博物館へ六〇枚出品されたものです。

そこでフロア展ですが、国土地理院の地方測量部が中心となって各地の関係者に働きかけており、色々な形の実行委員会が形成されて、資金集めや具体案が検討されています。一月現在の計画状況は別項の通りであります。

意欲のあるグループができれば、日程さえ合えば、どこにでも貸し出しを行うことになっており、おなじみの土地家屋調査士会、測量設計業協会、ウオーキング協会が人的協力をする体制となっています。資金も百万円くらい用意すればよさそうです。どこの街でも、市長さんが決心すればできる話なのですが、まだ自治体主導、社会教育の一環としての企画は、ほんとに少ない状況です。いづれも地図・測量関連のグループ中心の計画となっています。

フロア展は意欲のほかに物理的条件もともなっています。展示地域

周辺の数十枚ならどこでも問題ありませんが、全日本を広げるには少なくとも一〇〇〇平米、できれば一八〇〇平米くらいが必要です。大型体育館でなければ応じられません。まだ、別表の計画では全図を展示するフロア展は計画されていません。

できたら、東京近辺で二〇七枚全部を展示するフロア展が開ければ、と考えていますが、会員諸兄姉に名案はありませんか。まだ、間に合います。是非お考えください。

それから記念誌です。この二つの展示会用に記念誌として図録を刊行することになりました。A四版一八四頁。企画の中心であるアメリカ伊能大図の基本的な資料集とすることを第一の目的として、カラー一三〇頁をこれにあてました。展示には関係なく、地形が面白い場所、人口密度の高い場所の図版を、地名が読めるような形で、出来るだけ多く収録しました。

あわせて、今回の博物館展において同じく里帰り展示する海外伊能図の優品、イブ・ペイレ氏中図の細密図版も一六頁にわたって収録します。ペイレ中図はすでに国内に入って破損箇所を修復中です。これは、共同通信社、京都新聞と協力しておこなった海外で破損している伊能図の修理呼びかけに、ボランティアで応じてくれた京都の日本写真印刷の手で行われているものです。その状況は、朝日新聞などで詳しく報じました。

図録の印刷も日本写真印刷で行います。超細密印刷で、肉眼では読めなくても拡大鏡を使えば読めるよう精密な印刷をいたします。

イブ・ペイレ氏中図は針突法で制作され、天測地も明示されている完成度の高い最高級の副本ですが、これまで全面的な撮影をされたことがない中図であります。高精度な図版として全図刊行されるのは本図

録がはじめてです。

アメリカ大図、フランス中図と二つの伊能図の初出版である記念誌は人気が出るものと期待しています。定価二五〇〇円と少し高いかも知れませんが、売り上げは、今回の展示会の財源としても期待しています。会員諸兄姉には、発行後近隣の図書館などに購入をはたらきかけていただければありがたいと存じます。



ペイレさんを迎えて記者会見 11月18日京都

アメリカ伊能大図展実行委員会編（記念誌委員長 渡辺一郎）、発行

は日本地図センター（編集委員長 鈴木純子、編集委員 清水靖夫、長岡正利、渡辺一郎、他）です。会員向けには直接申し込みに限り、送料込み二〇〇〇円の特価を設定する予定です。

博物館展では、アメリカ、フランスからの伊能図のほか、関東大震災のとき東京大学図書館にあって焼失したと伝えられてきた伊能家控図と思われる東京大学総合研究博物館の伊能中図や、伊能忠敬記念館の測量器具類も展示されますが、図録ではこれらについては割愛しました。（二〇〇四、一、五）



アメリカ伊能大図展の会期・開催地予定(平成一六年一月現在)

—博物館展—

神戸展 16年4月17日(土) — 5月16日(日)

主催 神戸市立博物館、国土地理院、アメリカ伊能大図展実行委員会、神戸新聞社、共同通信社、NHK

企画協力 伊能忠敬研究会

仙台展 16年6月4日(金) — 7月19日(月・祝)

主催 仙台市立博物館、国土地理院、アメリカ伊能大図展実行委員会、河北新報社、共同通信社、NHK

企画協力 伊能忠敬研究会

熱海展 16年7月30日(金) — 9月5日(日)

主催 MOA美術館(熱海)、国土地理院、アメリカ伊能大図展実行委員会、東京新聞社、共同通信社、NHK

企画協力 伊能忠敬研究会

名古屋展 16年10月2日(土) — 11月7日(日)

主催 徳川美術館、国土地理院、アメリカ伊能大図展実行委員会、中日新聞社、共同通信社、NHK

企画協力 伊能忠敬研究会

—フロア展—

神戸市 神戸市立博物館 16年4月17日 — 5月23日

主催 神戸市立博物館、「伊能大図近畿地区フロア展」実行委員会  
協力 神戸新聞社、共同通信社、NHK

仙台市 仙台市科学館 16年6月4日 — 6月13日

主催 仙台市科学館、伊能大図「フロア展」東北地区実行委員会  
協力 河北新報社、共同通信社、NHK

札幌市 札幌市中央体育館 16年7月23日 — 7月25日

主催 札幌市中央体育館、「フロア展」札幌地区実行委員会(仮)  
協力 北海道新聞社、共同通信社、NHK

帯広市 帯広市十勝プラザ 16年7月30日 — 8月1日

主催 帯広市十勝プラザ、「フロア展」十勝地区実行委員会(仮)  
協力 北海道新聞社、共同通信社、NHK

松山市 松山市総合コミュニティセンター 16年8月21日 — 8月25日

主催 松山市、伊能大図「フロア展」実行委員会、  
協力 愛媛新報社、共同通信社、NHK

広島市 広島県立美術館 16年10月4日 — 10月24日

主催 広島県立美術館、「フロア展」中国地方実行委員会(仮)  
協力 中国新聞社、共同通信社、NHK

名古屋市 名古屋科学館 16年10月29日 — 10月31日

主催 名古屋科学館、「フロア展」中部地方実行委員会  
協力 中日新聞社、共同通信社、NHK

福岡市 福岡市立少年科学文化会館 16年11月26日 — 11月28日

主催 福岡市立少年科学文化会館、フロア展九州地方実行委員会  
協力 西日本新聞社、共同通信社、NHK

新潟市 新潟市歴史博物館 16年12月予定

東京都または千葉県 計画中、未定

共通後援 国土地理院、アメリカ伊能大図展実行委員会(東京)

## 平成地図御用所から



昨年（平成27年）の春、東京は世田谷区松原に「平成地図御用所」の看板が掛けられた。ご承知のアメリカ大図着色制作の現場になった。

誌上では「伊能洋チーム」と紹介された御用所一同をここで紹介しよう。大図復元のリーダー伊能洋さんは「アメリカからのデジタルデータの地図にどんな用紙が最適か。色付けも本来の地図に少しでも近づけるため試行錯誤を重ねた」という。制作のご苦労のひとつである。

今度の地図色彩では選択された紙質により、従来の顔料ではなく色合い重視から水彩絵具が採用された。制作過程は何人かの分業になるため、海岸線の色調、幅などお互いの地図を並べて検証した。原寸での作業のため御用所の作業スペースが狭く感じられた。また、対馬など海岸線が複雑な地域の彩色には手間がかかったなど苦心があった。

このアメリカ大図では5 cmから2.5 cm四方の書き込みが見られた。伊能図の特徴にあるコンパスローズは無く、合わせ印だけ。英文のスタンプがあったり、図での家並みは、一般には△（屋根）だがこの地図では■（塗りつぶし）になっていたなど、新しい事実にであう。

これから美しい「大図」をご覧になるときは、後世に残る大仕事に携わった御用所のみなさんを思い出していただければ。（編集部）

下写真：御用所の着色作業（右） 伊能洋さんの記事（読売新聞15・11・3）

「伊能大図」の復元を指導した洋画家

伊能 洋さん 69



「こんなに遠征が日本海に近かったなんて初めて知りました。床に広がると、厚手の巨大な日本地図は、国土地理院が復元した伊能忠敬の「大図」の写本、その彩色を監修した。

図書館で見つけた。米図が添ったのはデジタルデータの地図。和紙に描かれた本来の地図に少しも近づけるため、色付けも日本にある地図を見学に来入を見ながら「大図」の写本を参考にした。

「先祖様孝行できたかな」

伊能洋さんは、東京・世田谷にある「伊能大図」の復元作業に、昨年秋、米図の写本を参考に、色付けも日本にある地図を見学に来入を見ながら「大図」の写本を参考にした。

伊能洋さんは、東京・世田谷にある「伊能大図」の復元作業に、昨年秋、米図の写本を参考に、色付けも日本にある地図を見学に来入を見ながら「大図」の写本を参考にした。

（文化財 片岡 正）





「平成地図御用所」一同・東京国立博物館平成館にて  
右から

浅井和春、岡村 茂、大野和俊

中央後ろ 浅井ふみ 前 伊能 洋

上羽博子、伊東弥穂、浅井京子、伊能陽子のみなさん

#### 日本画の雛たちと猫の手

浅井 京子

平成館一階ロビーに敷き詰められた六十枚の着彩されたアメリカ発見の大図（コピー）は想像以上に壮観だった。仕事はまだ続いていたが、自分達のしてきたことを形として実感することができて、若い四人がなんとも誇らしげ。最初の興奮が納まると、緑の発色の悪さが気になりだす。側線の朱を際立たせるためといわれるが、やはり少々納得がいかない。自分達の仕事がストレートに再現されなかったことへの歯がゆさ。それでも地図の上に座り込んで見ている人達を見れば心がなごむ。

当初、できるだけ現物と同じ材料で復元したいと考えたが、デジタル情報を再現する際の用紙の問題でまず挫折。和紙風用紙は水の吸収が良すぎて却下。用紙が和紙風さえも使えないとなれば日本画の絵具にこだわる意味もありない。手のちがいがなるべく出ないようにするため水彩絵具で生の色（チューブから出したそのままの色）を使うことにする。ただ日本画家の雛達はこと山の緑に関しては生の色にあきたらず混色。原則はあったものの、描き手の特色が出る。最初の約束は25枚、それが結局ほとんどすべて塗ることになってしまった。私はおやつ係プラス猫の手。猫の手は海は塗らない。技倆なさはいかんともしがたく、迷惑以外の何物でもないから。雛達はさすがうまかった。それにしてもおもしろい経験をさせていただきました。

# 充実した着彩作業

浅井 ふみ

春に伊能先生より地図着彩プロジェクトの提案があり、共に作業を手伝ってくれる仲間を探し集め、寒い夏を経て秋も深みを増す頃、東博での展示を越え、東京に初雪が降ったその日に一連の作業が完結。思い起こせばこの半年間、辛かった事よりも仲間と共に作業に従事する、楽しく充実した時間に満たされていたように思います。一連の作業でお世話になった全ての方々、いつも温かく見守ってくれたみんな。どうもありがとう。おつかれさまでした。



## 歴史的な作業に感謝

大野 和俊

今回この地図の仕事に関らせて頂き、伊能図に触れ、歴史的にも意義のある作業をさせていただき大変有り難かったです。



## 着色する事

自体には様々な矛盾がありました。仕事としての完成度と展示用との割り切りの隔たりの間でバランスを取る事が難しかった様に思います。

この場をお借りして関係者の皆様、連日お世話になりました伊能家の方々に厚く御礼申し上げます。

## 時間と空間を越えた不思議な心地

伊東 弥穂

思いがけず貴重な体験をさせて頂き、感謝致しております。伊能忠敬についてほとんど何も知らなかったのですが、先生方が折々物語って下さり、この地図は忠敬さんをはじめ、過去と現在の沢山の人の願いを紡いだ代物で、なぜか時間と空間を越え今私達が筆を加え濃密



### 海色の美しさと気になった地名

上羽 博子

着色は各人のクセで海、街道の幅や山色が違い、自然に繋がるよう修正するのに苦労し、着色時点で隣の図と合わせて描くべきだったと思います。地図センターで並べた時の爽快感が、東博で出なかった



な時を過ごしている不思議……

何度も途方も無い心地になりました。展示を見た方々が各々に途方も無い気持ちになったと、くれたとの事、その一端を担えて光栄です。忠敬さんパワーは今も歩き続けています。

### 改めてまとめた大図を見てみたい

岡村 茂

伊能アトリエに三十年以上もお世話になっておりますが、忠敬さんに係わることはありませんでした。このたび大図に色を付けることにより少しでも役に立つことが出来た事を嬉しく思っております。私の子供と同じ年頃の若者たちと作業をしましたが、色目を合わせるのが難しく、色々と教えてもらったり直してもらいながら終わらせることができました。改めて一七五点の大図を一枚にまとめた地図をぜひ見てみたいものです。

のは測量線の赤を気にして印刷した為と思われます。今回の着色復元図の魅力は海色の美しさなので、巡回展ではそれを考慮して頂けると嬉しいです。「乙女村」など気になる地名や六甲山が鼻高山だったり、様々な発見があり面白い体験でした。ありがとうございました。



(写真・伊能洋氏)

忠敬の「年賀状」 娘の妙薫宛て

藤岡 健夫

我が家には、先祖から譲られたもので、伊能忠敬が測量先の九州から佐原に住む娘の妙薫に宛てた年賀状があります。

内容は、遠く離れて心配している娘に対して心配はいらないと具体的に述べ、愛情のこもった格式の高い年賀状と思います。書初（書初）の狂歌には老いてますます元気な様子が伺えます。

新玉の御祝千里も同じ御事にて  
目出度く申納まいらせ候 弥御揃被成  
御平安と御嬉敷存し候 我ら初一同  
無難加寿致し候 御祝可給候  
一、越年所、測量先の儀は本家へ  
申し遣候間、書面御覽可被成候 扱御用左記ハ  
国々御領主方より何事も差支なく  
御執計被下候得ハ何不自由も無之  
江戸住宅より大ニ宜候 御安心可被成候

新玉の御祝千里も同じ御事にて

目出度く申納まいらせ候 弥御揃被成

御平安と御嬉敷存し候 我ら初一同

無難加寿致し候 御祝可給候

一、越年所、測量先の儀は本家へ

申し遣候間、書面御覽可被成候 扱御用左記ハ

国々御領主方より何事も差支なく

御執計被下候得ハ何不自由も無之

江戸住宅より大ニ宜候 御安心可被成候

一、書初の狂歌

七十歳ハ古来稀な里と東坡とうばの詩にもあれハ

古来にも稀なる春に値賀ちかの浦

八十嶋かけて壱岐の松原

右 東河老入

歳且試毫

東河老父

正月二日

妙薫御坊

一七五の御寄

七十歳を暮すはるまじと東坡の詩もなれ

古事よも柿をさす値賀の浦

八十倍のけて壹皮の松系

右

東河を父

歳旦試毫

東河を父

二月二

如きもの坊

原寸・縦168×横420mm

註

- ・正月二日 文化十年（一八一三年）の正月
- ・妙薫 伊能忠敬の長女。夫に死別した後、仏門に入り妙薫と称した。
- ・東河 伊能忠敬の号（別名）

・東坡

中国・宗時代の詩人であるが、古稀の詩の作者は杜甫で、これは誤りと思う。

・値賀の浦

佐賀県東松浦半島のあたり

現代語訳

新年のお祝は、遠く離れていても同じことで、明けましておめでとうございます。皆様お揃いでお元氣のことと嬉しく存じます。私をはじめ一同も、無事年を越しました。喜ばしいことです。

年を越した所、測量先のこととは、本家へ手紙を出しましたのでご覧下さい。

さて、測量については、国々の殿様方から、何事についても困ること無く取り計らって下さるので、なんの不自由もありません。江戸の家にいるよりも、こちらの方が大変よろしく思うくらいです。ご安心下さい。

ひとつここで短歌を作って書初としましょう。

七十歳は古来稀なりと東坡の詩にあるので、これにちなんで「古来からめずらしいといわれる七十歳になった。

この春に、私は値賀の浦にきて新年を迎えました。

これから多くの島々を測量して

老岐の島までわたります」

（八十歳までかけてもの意がある）

右

書初

（ふじおか たけお・伊能家縁戚）

## 続 ハルビンにて「師兼留学生」の記

岩城 元

### 三度目の氷点下の冬

新聞社を定年退職後、わが忠敬さんを見習ったわけではないけれど、中国のハルビン理工大学に「ボランティアの老師（教師）兼留学生」としてやって来て、いつの間にか二年余りが過ぎた。最初は一年くらいのもりだったが、大学側から「あと一年」「ついでにもう一年」と言われて、氷点下10℃25度の下で三度目の冬を迎えている。

今年も、やっていることは一年目、二年目とさして変わらない。日本語科四年生を相手に週六時間の「日本語精読」と四時間の「日本語作文」、それに大学院二年生を相手に週二時間の「中日比較文化論」。比較文化論なぞと言うと、何か高尚なようだが、なにせ担当の老師が、いい加減なものだから、講義もそれ相応にならざるを得ない。相手の院生も女性四人だけなので、講義と言うより雑談で時間をつぶしている感じ。講義が終わると、時には「さあ、行くか」と街に繰り出し、生ビールをおったり、鍋をつついたりしている。

四年生は四クラスで百人ほど。うち七割方は女の子で、教室は華やかだ。そのせいもあってか、まあ、楽しいことは大変に楽しい。いっこうに退屈しない。が、丸三年もやれば、ここらあたりが潮時か。大学側からもし「ここまで来たのだから、さらに一年」と言われたら、どうしようかと迷っている。

### 新型肺炎で株を上げる

「やっていることは、さして変わらない」と言っても、この一年は周囲でいろいろあった。その第一は、なんと言っても「新型肺炎SARS」の流行だろう。中国ではSARSのことを「非典型肺炎」、略して「非典」と呼んでいる。

幸い、ハルビンでは非典の患者は出なかったが、四月の終わりから二ヶ月余り「人間の移動が非典流行の最大の原因」とばかりに、学生たちはキャンパス内に閉じ込められ、一歩も外へ出られなくなった。日本の大学と違って中国では、学生たちはキャンパス内で集団生活を送っているから、こんなことが可能だ。われわれ老師だけは出入り自由だったが、外部の人も完全にシャットアウト。学生たちの両親、あるいは恋人が訪ねてきても、もちろん中に入れない。柵を挟んで話し合うという、まるで刑務所の面会のような光景がハルビンのあちこちの大学、専門学校で見られた。

当時、わが日本語科の日本人老師は僕のほかに青年海外協力隊の四十歳の男性、大学に有給で雇われている二十歳代半ばの女性二人の計四人だった。ところが、青年海外協力隊員と女性一人が「非典が怖い」と五月早々、授業を放り出して突然日本に戻ってしまった。おかげで、学生たちからは「私たちは外出もしないで非典と闘っているのに、日本人老師だけが逃げ出すとは何ごとですか」と責められる。「二人にも事情があるだろうから・・・」と、なだめるのに忙しかった。

敵前逃亡兵のおかげで、もう一人の女性と僕とで彼らの授業の一部





4年生の「日本語作文」の試験を監督中。きびしく(?)目を光らせる。

を肩代わりする羽目になった。僕が逃げ帰らなかったのは「学生がいて授業があるのに老師が逃げるわけにはいかない」なんて高尚な考えがあったからではない。帰るのは力ネもかかるし、第一面倒くさい。もし、非典にかかっても死ななきやいだけのこと。中国で入院でもすれば、得がたい体験になる。またとない土産話ができる、原稿のネタにもなる——程度に考えていただけだ。

が、学生たちにはそうは見えなかったらしい。何かのことで作文を書かせていると「岩城先生が日本へお帰りにならないと聞いた時、感激で涙が出ました」なんて言う女の子もいた。けがの功名ではないけど、非典のおかげで株を上げてしまった。

逃げ帰った二人は七月はじめ、非典がすっかり収まってから戻ってきたが、学生たちは「先生、お帰りなさい」とにこにこしている。腹

の底を見せないところなぞは大したものである。

日本人留学生たちも非典が騒ぎになるや否や、さっさと日本に逃げ帰ってしまった。秋になつても、年が明けても戻ってこない。こちらは何ら咎めるべきことではないが、一応「留学生」の看板を掲げている僕にとっては仲間がいなくなってしまう。これ幸い(?)と、中国語の勉強もすっかり止まってしまい、未だに「初歩の初歩」のまま。タクシーに乗ってなんとか行き先を伝えられるくらいで、まったくお恥ずかしい限りだ。留学生業は開店休業、いや閉店状態である。そうかと言って、留学生の「看板」を完全に降ろしてしまうと、老師業の方がさらに忙しくなりそうでもあるので、ずるく看板だけはそのままにしている。

#### 「西北大学寸劇事件」余波

いろいろあった中で、わが大学のことではなかったが、西安の西北大学での「寸劇事件」というのもあった。十月末、大学の文化祭で日本人留学生らが「Tシャツの胸に赤いブラジャー、下腹部に紙コップ」の格好で寸劇を演じたら、中国人学生らの怒りを買い、一時は千人を超す抗議デモに膨れ上がったうえ、日本料理店までが襲われた事件だ。留学生らはTシャツの背中の「日本」「中国」という字の間にハートマークを描き「日中友好」を訴えたつもりだったらしい。

折しも、日本では中国人留学生・就学生による福岡の一家四人殺害事件の全貌が明らかになりつつある。同じ留学生たちが起こした事件。そのせいか「福岡の事件」と比べると、西安の話なんて可愛いものなの

に、中国人はなぜあんなに大騒ぎするのか。日本では中国人排斥のデモもないのに・・・」と日本で言っている人がいるらしい。「中国で日本人留学生が福岡の事件のようなことを起こしたら、どんな騒ぎになるのか。戦慄を覚える」と言う中国在住の日本人がいる。

うん、これこれ、教材になるぞ。さっそく日本語作文の授業で取り上げた。「かくかくしかじかのことを言っている日本人がいる。日本語を学んでいる中国人として、君たちは西安の大騒ぎをこうした日本人にどう説明するか。どう納得させるか。四百字詰め原稿用紙一枚に書きなさい」

学生たちの説明は意外にと言うか、ある意味ではスッキリしている。「西安の事件と福岡の事件はまったく性質が違ふ。比べることなんて出来ない」と言うのだ。

まず、西安の事件——日本人留学生たちの格好は中国人を侮辱していると受け取られても仕方がない。なぜなら、日本はかつて中国を侵略した。その傷は今も癒えていない。中国人は日本人を今も恨んでいる。日本人の一挙一動は中国人から注意深く見られている。たとえば、韓国・朝鮮人がしたら全く問題にならないことが、日本人がしたら問題になる。おまけに、日本軍が残した毒ガスによる中国人の死傷事件、日本人による集団買春騒ぎが最近、相次いで起こり、日本人に対する中国人の神経は普段より敏感になっていた。それが西安での騒ぎを大きくした。西安で中国人学生らが寸劇に関係のない日本人留学生を殴って怪我までさせたのはよくないが、彼らの愛国の感情はよく理解できる——といったところか。赤いブラジャーと紙コップがいきなり「中

国人民抗日戦争」にまで遡ってしまうのだから、日本人はビックリする。もう少し生の言葉で書くと——

「日本は今でも中国侵略について正式に謝っていない。なのに、さらに中国人を侮辱した。先だつての集団買春事件も中国人への侮辱じやなくてなんだろう。中国人はもう耐えられない。今度の寸劇事件はそういう敏感な時期に起こつて、中国人の脆い感情を傷つけた」

「第二次世界大戦は中国人が日本人に侮辱された戦いだった。留学生らの踊りはもう一つの侮辱だった。そのうえ、最近はたくさんのお愉快なことが起こつた。寸劇をきっかけにしてその仇を打つたのだ」

「後悔して謝ると言うことは、どんな甘い言葉を使おうと関係ない。行動に表してこそ、過去の過ちが許される。ところが、日本人はそうではない。その日本人があのような寸劇をやつたとなると許されない。日本人はあれをわざとやった、もしかすると、またわが国を侵略したのか、と思つてしまう」

「日本人への憎悪感と愛国の感情の二つが同時に爆発した。国を愛する感情は人間が本能的に持つべきものだ。私たちの世代は数十年前の人たちに比べて愛国の感情に乏しいと言われている。しかし、今度の事件はそうではないことを証明してくれた」

次に、福岡の事件——中国人を侮辱した寸劇と個人の犯行とを比べることは出来ないと言う。これも、生の言葉で書くと——

「日本で中国人がおカネを取るために人を殺したのは個人的な事件だ。犯人が中国人でも日本人でもアメリカ人でも関係がない。西安の事件は、個人がコソコソとやる犯罪とは全く違う」

「犯罪は犯人個人のことで、日本人も中国で罪を犯すことがあるだろう。こうした個人の犯罪は愛国心とはかわりがない。日本人に馬鹿にされることは、中国人にとって耐えられない」

——というのが、わが大学の日本語科学生の寸劇事件「解説」である。それはそれでいいのだが、「日本は中国侵略について謝っていない」などと言われた時には、1995年のいわゆる「村山談話」などを示して「日本国がいかにも正しく過去に対処してきたか」(当方も突然、愛国の感情らしきものが盛り上がりつつくるみたいだ)を説明している。

村山談話は「戦後五十周年の終戦記念日にあたって」と題して、当時の村山富市首相が国会で述べたものだ。「わが国は、遠くない過去の一時、国策を誤り、戦争への道を歩んで国民を存亡の危機に陥れ、植民地支配と侵略によって、多くの国々、とりわけアジア諸国の人々に対して多大の損害と苦痛を与えました。私は、未来に過ち無からしめんとするが故に、疑うべくもないこの歴史の事実を謙虚に受け止め、ここにあらためて痛切な反省の意を表し、心からのお詫びの気持ちを表明いたします」と言っている。

さあ、どうだ「謝っていない」なんて言いがかりは許さないぞ——というわけでもないのだが、こう話すと、学生たちも「フーン」といった顔つきをしている。ところが、しばらくして別の作文を書かせていると、相変わらず「日本は謝らない」というのが出てくる。あまつ

さえ「日本は未だに中国に戦争の賠償金を払わない。けしからん」というのもある。ちなみに、1972年の「日中共同声明」「中日共同声明」で中国は「中日両国国民の友好のために、日本国に対する戦争賠償の請求を放棄することを宣言」している。

いやはや、結構疲れもするが、「先生、こうした微妙な問題は授業で取り上げない方がいいのではないでしょうか。お互いの感情を傷つけますから・・・」と、気を遣ってくれる学生もいたりする。

#### 学生たちに尊敬(?)されて:

一時帰国した折、大学時代の友人たちと飲みながらハルビンでの話をしていたら、一人が「面白そうだな。おれも行きたい」と言い出した。商社を定年で辞めた男だ。「ハルビンの冬は中国人でも嫌がるくらい寒いぞ」「大丈夫だ」「書斎、寝室、食堂三部屋の宿舎はただで使えるが、ボランティアだから一円も出ないぞ。それどころか、教材費も自分持ちだから、出費も結構かさむぞ」「いいよ」「で、何が教えられるか?」「おれたちは学生時代、法学部だったが、自分は文学部に行きたかったくらいだ。日本文学なら詳しいよ——というわけで昨年九月の新学期から彼が新任の老師としてやってきた。団地の自治会長という要職(?)をなげうつての赴任だ。

友人は永井某と言ひ、僕より一歳半ほど年長。機嫌よく「日本文学史」の講義をしたりしている。赴任して間もないころ、女の子が二人やってきて言う。「先生、永井先生の日本文学史の授業はよく分からないのです」。さっそく彼に伝えると「そんなはずはないのだけどなあ。



日本語学科の大学院1年生とレストランでパーティー。院生は全員女性で、向かって右側の男性は新任の永井老師。

おれの授業を聞いて、みんなげらげら笑っているぞ。分かっているから笑うのだろう」と腑に落ちない様子だ。そのことをまた女の子たちに伝えると「永井先生の身振り手振りや顔つきが面白いから、私たちは笑っているんです。内容は分からないのです」。講義内容がやや高級すぎたのだ。

その後、学生たちから不満を聞かないところを見ると、軌道修正したのだろう。永井老師は講義に慣れてくると、日本からソフトボール用具を二チーム分取り寄せて（もちろん自腹）実技指導にまで乗り出し、学生たちの人気を集めている。

「人気」と言えば、ボランティアでやっていることが、学生たちに尊敬の念を呼び起こしているようでもある。作文にはそういうのがちよくちよく出てくる。いささか気恥ずかしいが、少し引用すると――

「うちの学校にボランティアの日本人先生が二人おられます。以前は、ほかの日本人先生と同じように給料をもらっている先生だと思っていました。ボランティアと知ってとてもびっくりしました。一円ももらわないのに、たくさん先生の授業をしておられます。なんて高尚な精神でしょう。それに、二人の先生は年寄りなのに、日本でのくつろいだ生活を捨てて、ハルビンの冬の寒さに耐え、苦しい生活をしていらつしやいます。岩城先生と永井先生には本当に感心しています。中国人としての私は、日本人が中国の教育に貢献していることに對して、心の底から感謝と尊敬の気持ちが湧いてきます」

「わが大学の日本人教師四人の中に二人の年寄りがいます。二人は定年後、中国へ来て、ボランティアとして日本語の授業をしています。二人を知ってから、日本人に対して抱く感じがよくなりました」

「日本人先生の中には、給料をもらわないでボランティアでいろいろ教えてくださる先生もおられる。その国際主義精神には感心し、尊敬している」





大学院2年生とピアホールで乾杯。連日、こんなことばかりやっているわけではありません、念のため。

「年寄り」「年寄り」と言われるのは、いささか気に食わないが、中国では一般に、カネをもらわずに他人のために働くなんて信じられないことのような。ボランティアでやっているだけで感心されてしまうのだらう。長年生きてきたが、人様から感謝、感心され、尊敬までされた記憶などといない。もっとも、中国では会合・集会での挨拶の時には、まず「尊敬する何々さん」「尊敬する皆さん」などと切り出

すのが普通だ。言わば、慣用句だ。学生たちの「尊敬」もその程度のことかもしれないが・・・。(いわき はじむ)

編集部 岩城さんは朝日新聞インターネット「AIC」に毎週木曜日

「ハルビン発 なんのこっちゃ」と題してコラムを連載中です。

≡ <http://www.asahi.com/column/aic/index.html>

□環境を地図で見る、地図で考える、地図で伝える：野々村さんの講演  
会員で元国土地理院長の野々村邦夫さんが11月29日「多摩自然科学研究会」総会にて、10周年記念講演をおこないました。

地図は便利で面白い。日本と世界の環境問題。環境問題と地図をテーマに、地図を見る・考える・伝える。「伊能図の作成と利用」はスライド、複製地図の公開などで参加者の視覚に強く訴える。など地図づくりと環境問題への取り組みをわかりやすく話されました。

野々村さんは岩城さん同様、アサヒコムにコラムを連載しています。岩城さんと同じ木曜日、題して「駅弁地理学」です。「伊能大図を覗き込む」では東博展を紹介していました。毎週、幅の広い視野での論考に、駅弁が写真と値段でおいしく見られます。

≡ <http://www.asahi.com/column/aic/index.html>

□第四回「伊能ウオーク・番外編」は塩の道に

太平洋岸は静岡県相良町から日本海の糸魚川市まで、日本列島の中心部を南北にフォッサマグナが縦貫しています。今年の番外は第一ステージが4/17～23秋葉街道、第二ステージは4/26～29伊那街道、第三ステージ6/2～6千国街道が予定されています。JWA主催。

# 柏木乙右衛門家の先祖「無覚」とは

佐久間 達夫

伊能三郎右衛門家の家業や他家との交際に裏方として尽くし、忠敬内妻の出生宅といわれている柏木久兵衛家(現当主柏木俊一氏)から、佐倉市の国立歴史民俗博物館に寄託された「伊能家関係文書」のなかに「伊能家・柏木家先祖書」(資料1)があつた。

「先祖書」には、伊能家の初代景久、並びに五代景知から十二代忠誨迄の戒名、死亡年月日、柏木久兵衛家の初代から三代迄の戒名、死亡年月日などが記述されていて、記述内容から、柏木家四代目当主久兵衛(明和二年出生、天保五年、七十才没)が記したものと推察される。

先祖書のなかに

○ 伊能三郎右衛門家先祖書

發心院即到無覚居士 寛保三亥年六月十六日 八代目伊能三良右衛門 柏木久兵衛先祖 但シ三男 椎木・新町工分地。

○ 柏木久兵衛家先祖書

性壽院満空法電沙弥 宝曆四戌年十月廿六日 無覚三男久兵衛先祖 一代

と、記されていた。

柏木家が、新町(現在の佐原市下新町一八〇番地、佐原市給食センターの敷地)に住んでいたことは、柏木家の口伝(九代目柏木順一郎氏妻とし女)と、伊能家所蔵の「佐原村新宿の村絵図」で知っていたが、「柏木久兵衛の先祖が、伊能昌雄の三男である」という記述は初



資料1 伊能家・柏木家先祖書

めて見た。

そこで、「伊能家家牒」で、伊能昌雄の項を読み直してみた。

# ○ 伊能家家牒

・七代目 伊能三郎右衛門昌雄（幼名三太郎 初名源六）

法号 谿心院即到無覺居士 寛保三亥年六月十六日死す。行年五十二才。

・宝永七寅年正月四日、伊能源六（昌雄）方へ伊能権之丞娘（初名くん、後名はん）妻に申請け候筈に相究め、小林玄番、伊能仁右衛門罷り越し、約束致す。其の後婚礼す。

・享保廿一年辰年五月五日、伊能昌雄嫡男徳右衛門景慶死去す。江戸本所御台所町三郎右衛門旅宿で行年二十一才。（この条要約して記述）。

・三郎右衛門（法号無覺）儀、妻相果て候後も無妻にて、其の後徳右衛門成長に随い、利右衛門（兵左衛門分家）差し添え、南中村、八日市場辺、又は江戸へ罷り出で、近頃は江戸へ旅宿を構え茶道並びに笛、俳諧相嗜み候所、嫡子徳右衛門死去に付、弟、小網町二丁目伊能三郎兵衛（長由）を家督に相究（決）め、其の以後は江戸村松町隠宅に罷り有り天野三左衛門（広口）娘（名あさ）田村三太夫引請けにて貰い請ける（是は、三七郎死去に付、佐原へ下向の節、熟談の上離縁す）（頭註後妻田村三太夫娘）。

・伊能三郎右衛門昌雄死去の節、田畑屋舖持反別の覚

椎木（現佐原市椎木）の畑、高二メ、二石一斗九升三合三夕五才真木場（柏木）屋敷に成る。

これらの記述によると、昌雄は、宝永七年、十九才のとき、伊能権

之丞景胤の娘と結納をかわし、その後結婚し、二十五才のとき「はん」との間に長男景慶をもうけたが、「はん」は、享保九年二十七才で死去し、続いて景慶も享保二十一年に二十一才の若さで亡くなっている。

その後、昌雄は、江戸と佐原で茶道、俳諧、笛などを嗜む生活をしていて。その頃、江戸村松町隠宅で、天野三左衛門娘と、田村三太夫引請けで結婚した。しかし、弟・長由（伊能家九代当主）が、寛保二年に三十七才で病死したため、妻「あさ」と、熟談のうえ、離縁して、佐原へ下向した。

伊能昌雄と初代柏木久兵衛の出生年を比べて見ると（資料2・3）久兵衛の方が十六年早く生まれている。したがって、この記述はおかしい。しかし、ここに記述されている久兵衛の祖が（以下筆者の推測）、柏木幸七であるとすれば、幸七は、元文二年生まれで、昌雄四十六才のときの子であるので記述内容があう。それが事実とすれば、昌雄は、幸七が七才のときに死去し、九代長由も、その前年に死去しているの、伊能家では当主不在であったので、「あさ」が、幸七を柏木久兵衛へ養子にやり、伊能家では、椎木の土地を久兵衛に分地したとも考えられる。そのため、柏木久兵衛家の埜域にある柏木幸七の墓石には、正面に幸七夫妻の戒名、左側面に「柏木氏・幸七」と、刻字されている。昌雄の長男は、伊能家八代景慶で、二男は、田村家で養育したが、早死か。三男が幸七である、とも考えられる。しかし、これは筆者の推測である。

（依拠資料・伊能家家牒・柏木家位牌・墓石・過去帳・口伝、伊能柏木家先祖書、測量日記、伊能忠敬書簡、佐原市新宿の村絵図）

○ 資料2 柏木久兵衛・柏木乙右衛門家略家系図

□ 柏木久兵衛家

初代久兵衛 ————— 二代久兵衛 ————— 三代久兵衛

性壽院満空法電沙弥 蓮光院本淨得円沙弥 観実院法蓮得淨沙弥  
宝暦四年七九才没 天明七年没 寛政九年没

——— 四代久兵衛 ————— 九代順一郎 ————— 十代俊一（現当主）

本性院琢道心円信士 妻 とし  
天保五年七〇才没

□ 柏木乙右衛門家

初代乙右衛門幸七 女（乙右衛門幸七の二子）  
心蓮妙諦信女（忠敬の内妻）

浄蓮院法光得善沙弥 寛政二年二七才没  
妻 明善院性蓮現貞

\* 寛政十二年、第一次  
蝦夷地測量出発の日、

幸七と二男時右衛門  
が江戸千住宿迄見送  
りに行く

（測量日記、忠敬書簡）

男 時右衛門  
常照院法性空信士  
文化八年四十才没

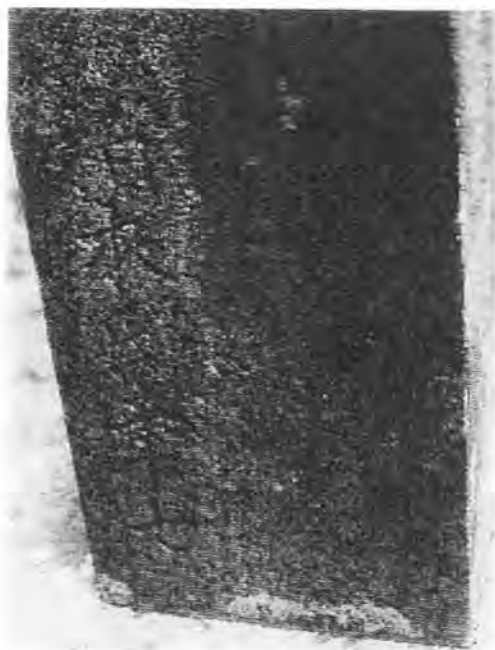
二代乙右衛門 ————— 三代音右衛門  
逢源院薫功徳讃信士 権律師寛映  
妻 きく （僧名周道房、  
観福寺の弟子）

○ 資料3 伊能家・柏木家年譜（註、年齢はかぞえ年）

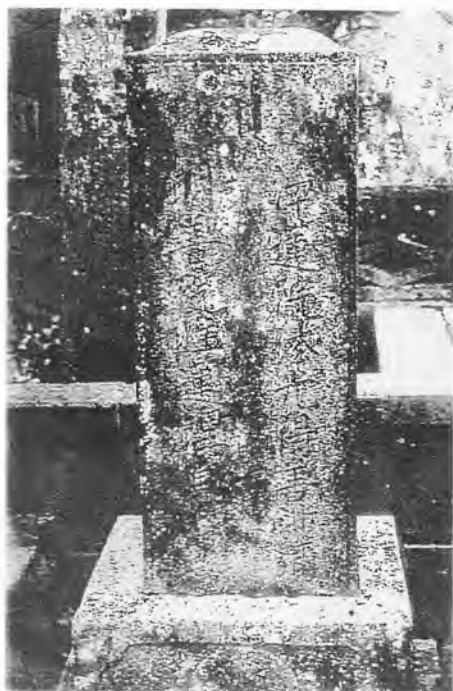


資料4 寛政6年以前佐原村新宿絵図

西 暦	年 号	こ と が ら
1676	延宝 4	一代柏木久兵衛出生
1680	延宝 8	一代久兵衛妻出生
1692	元禄 5	七代伊能昌雄出生
1698	元禄 11	昌雄妻はん出生
1706	宝永 3	九代伊能長由出生
1716	享保元	八代伊能景慶出生
1724	享保 9	昌雄妻はん没、27 才
1736	元文元	八代景慶没、21 才
1737	元文 2	柏木幸七出生（昌雄 46 才）
1742	寛保 2	九代伊能長由没、37 才
1743	寛保 3	七代昌雄没、52 才 （柏木幸七 7 才）
1745	延享 2	十代伊能忠敬出生
1754	宝暦 4	一代久兵衛没、79 才
1764	明和元	妙諦出生（幸七 28 才）
1768	明和 5	二代乙右衛門妻出生
1769	明和 6	一代久兵衛妻没 90 才
1772	安永元	柏木時右衛門出生



柏木氏、幸七の刻字  
浄蓮院の墓石側面



柏木乙右衛門幸七夫妻の墓石・佐原市観福寺

○伊能忠敬研究会主催「江戸開府四〇〇年記念講演会」開催



左から柏木さん、伊能さん、鈴木さん

昨年の東京地方は江戸開府四百年にあたり、さまざまな記念行事が行われました。研究会では柏木隆雄理事が中心となり11月13日千代田区中小企業センターで講演会を開催しました。会員へのご案内は都内及び近辺の方々にさせていただきました。東京国立博物館で「伊能忠敬と日本図」展が開催されているため、この展示に関する話題を講演のテーマに、会員と税理士

協会のみなさんを集めて開催されました。

柏木さんが進行役で忠敬のプロフィールを紹介。ついで鈴木純子さんが「東博公開の伊能図とは」と題し講演された。国会図書館在職中に、気象庁で伊能大図の関東周辺図四三枚を発見し、国会図書館への移管を実現したこと。アメリカ議会図書館での伊能大図発見にも、学術合同調査員として参加した時のように。アメリカ大図は二〇七面で別途三四号・三五号（佐倉）一〇七号（沼津）がある。未発見は一二号（宗谷岬）、一三三号（京都、大津）、一六四号・一六五号（福山、三原、今治）など。伊能陽子さんは制作中のアメリカ大図復元彩色作業の現場でのご苦労話を披露。詩人で日本ペンクラブ、日本童謡協会等に所属する柏木さんの見事な司会で、鈴木さん伊能さんとのシンポジウム形式の質問応答までなかなか味のある講演会になりました。平日の午後わざわざ足を運んでいただいた皆様にお礼申し上げます。



芳名録より

— 佐原伊能家を訪れた人々 —

遺芳子載

昭和二十二年師走

芦田均

人格高事業偉

使人發敬意

拜伊能先生肖像及  
送文 島田と郎謹啓

萬世師

大正丁巳三月

福島安正

しまだ さぶろう (一八五二—一九二五)

政治家。江戸生まれ。横浜毎日新聞社に入り、次いで文部書記官、一八八一年(明治一四)大隈一派と共に下野、改進黨・進歩党・立憲同志会の幹部。第一回総選挙以来連続して衆議院議員に当選。毎日新聞社社長。足尾鉾毒事件を支援、廃娼運動を進める。またジーマンス事件で活躍。著「開国始末」。

(広辞苑)

あしだ ひとし (一八八七—一九五九)

政治家。京都府出身。外交官を経て代議士。日本民主党総裁。一九四八年(昭和二三)首相在任中、昭電事件の責任を理由に政界を引退。

(広辞苑)

ふくしま やすまさ (一八五三—一九一九)

軍人。陸軍大将。信州出身。一八九二年(明治二五)ドイツから帰国するに当たり、単騎ベルリンを發し、シベリアを横断して帰国。情報将校として参謀本部に勤務、次長にいたる。

(広辞苑)

大正丁巳は大正六年

(伊能陽子)

お便り

伊能忠敬と明治の海軍軍人 小林 清

会報33号34号の芳名録では当時の海軍の退役軍人(将官クラス)が佐原を訪れています。「舞鶴軍港と町づくり」について調べていたところ次のことが解りましたのでお知らせいたします。

佐藤鉄太郎海軍中将については、白根貞夫氏レポートの通り第十一代の舞鶴海軍鎮守府司令長官に就任。

(大正九年八月一六日大正一〇年一月三十日)

佐藤は軍事理論家として名を残すだけでなく彼の教養も高く評価され、舞鶴に残された「書」が武幅(一幅はユニバーサル造船、一幅は舞鶴の旧家に在ったものを舞鶴市)が保存されています。

伊地知季珍海軍中将と日高壮之丞海軍大將が同道で佐原の伊能家を訪ねています。二人は共に薩摩藩の出身です。

日高壮之丞は嘉永元年(一八四八)生まれ、慶応四年一月戊辰戦争に参戦、明治四年海軍兵学校(後、兵学校)入寮、明治七年海軍少尉補、明治九年一月一四日軍艦日進に乗組み西南戦争に参戦。明治三五年常備艦隊司令長官、明治三六年一〇月一九日東郷平八郎と入れ替わり第二代舞鶴鎮守府司令長官に明治四一年八月二七日まで就任。伊地知季珍は舞鶴鎮守府参謀長(当時海軍少将)として明治三九年一月二二日より同四一年五月まで二人は軍務を共にしています。

佐藤鉄太郎は慶応二年、伊地知季珍は安政四年、日高壮之丞は嘉永元年、夫々文明の開けやらぬ時代に生まれ、明治海軍に身を置き

怒涛逆巻く海洋に明け暮れた日々、頼りは一枚の海図です。明治初年当時は頼れる日本地図は伊能図以外には無かったようです。海図も日本近海は英国海軍水路司版行のものを使っていたようで、柳権悦、肝付兼行等により「伊能図」を元に日本近海の家図が明治一九年に作られたと伝えられています。

その「伊能図」で翻製、又は謄写された地図や海図を頼りに奮闘した、若き海軍士官当時に想いを馳せ、佐原の伊能家を訪ねられ、忠敬先生の偉業に心うたれ「精力絶倫季珍千歳之龜鑑大正十一年十一月壮之丞」の軍人らしい端正な揮毫を残されたものとおもいます。

編集部より

前号の「解説のお願い」F・G・Hにつきましては誌面に一部不鮮明な箇所があり、お返事、ご意見がいくつかありますので、あらためてお知らせいたします。

はまき  
間さんの「出土した餅焼き網」その後

前号の羽間平安氏談話に関して姉の濱本さんからの情報です。

『「眼鏡」と「コンパス」と15cm位の「鉤尺(かぎじやく)」と餅網などが、墓地移転のため掘り出した墓石の下の陶製か木製の柩の中から出てまいりました。これらを父母(羽間平八郎夫妻)が白い下着姿で本堂の瓦敷の上で丁寧に洗っていた光景を思い出します。』と。

また、記事で上田先生は上田穰先生、魚住先生は魚澄惣五郎先生、濱本さんのご出身校は今の大阪女子大学です。おわびして訂正いたします。

編集部

『旌門金鏡類録』 (二)

小島 一仁

佐原村、津田家知行地となる

『旌門金鏡類録』第二冊の記事は、安永七年(一七七八)にはじまり、寛政一二年(一八〇〇)でおわる。書き出しは次の通り。

安永七年六月、月代官稲垣藤左衛門様より御本丸御側衆  
津田日向守様、当村本田五組高千八百六拾七石五斗七升八合七  
九才新田畑方高百四拾五石九斗老升式合流作高百五拾老石斗  
九升八合、<sup>並</sup>新村高式百三拾八石四合所村高式百貳拾七石六升  
七夕御引渡り地ニ相成候、依之六月十五日津田日向守様御用人渡辺  
忠藏殿目付久保田佐仲殿地方掛り大島林右衛門殿、<sup>並</sup>稲垣藤左衛門様  
御手代宮下順藏殿御下向年番名主権之丞御止宿御引渡相濟、廿日朝  
御出立

○解説文——(一)内は細字の部分

安永七年戊午六月御代官稲垣藤左衛門様より御本丸御側衆

津田日向守様、<sup>江</sup>当村本田五組高千八百六拾七石五斗七升八合七

九才新田畑方高百四拾五石九斗老升式合流作高百五拾老石斗

九升八合、<sup>並</sup>新村高式百三拾八石四合所村高式百貳拾七石六升

七夕御引渡り地ニ相成候、依之六月十五日津田日向守様御用人渡辺

忠藏殿目付久保田佐仲殿地方掛り大島林右衛門殿、<sup>並</sup>稲垣藤左衛門様

御手代宮下順藏殿御下向年番名主権之丞御止宿御引渡相濟、廿日朝

御出立

(但十五日朝御着、<sup>而</sup>名主組頭長百姓御目通仕候処、三郎右衛門儀奥  
州松島一覽、<sup>而</sup>罷越留守、<sup>而</sup>賀養子盛右衛門罷出候、其夜名主組頭、<sup>並</sup>  
長百姓三郎右衛門茂左衛門次郎右衛門七左衛門平右衛門仁兵衛半  
右衛門印鑑差出候)

佐原村は、江戸時代初期、慶長一三年(一六〇八)から約一三〇年  
間、天方家・興津家・近藤家等の旗本の相給知行地であつたが、元文  
五年(一七三七)から、一時、幕府直轄地となり、安永七年六月にま  
た旗本知行地にもどつた。しかし、今度は相給ではなく、佐原村全体  
が津田家の知行地になつたのである。右に掲げた文章は、六月十五日  
に、津田家と代官所の双方から役人が佐原村に下向して「御引渡し」  
の事務手続きが行われたことを記しているのであるが、終りの方の細  
字の部分に、ちよつと目をとめていただこう。

この引き渡しがあつたとき、長百姓の一人である三郎右衛門、即ち  
忠敬は、五月二十八日から六月二日までおよそ一ヶ月の間、妻をつれ  
て、奥州松島に観光旅行に出かけていて留守であつた。そのため、賀  
養子の盛右衛門が忠敬の代理をつとめたのである。盛右衛門は、忠敬

と縁つづきの上総国山辺郡片貝村（千葉県山武郡九十九里町片貝）の布留川家に生れ、少年の頃から佐原へ来て伊能家でくらししていたようであるが、長じて忠敬の長女イネを妻として伊能家の贅養子となった。安永七年に盛右衛門は二三歳、イネは一五歳であったから、おそらく二人は、この年から前年に結婚したのであろう。このとき、忠敬は二三歳、ミチは三七歳。はたらきざかりの商家の主人夫婦がつれだって、一月もの間、家を空けることができたのは、盛右衛門・イネ夫婦に安心して留守をまかせられるようになったからであらう。なお、ここに長百姓として七人の名があげられているが、そのうち三郎右衛門・茂左衛門・七左衛門・平右衛門の四人は伊能姓であり、次郎右衛門・仁兵衛・半右衛門は永沢姓である。伊能・永沢の両家が佐原村の旧家として力を持っていたことがわかるであろう。

### 「御救金」と「御勝手御入用金」

佐原村が津田家の知行地となつてから三年たつて、天明元年（一七八一）七月末に利根川筋に出水があつたので、地頭所の津田家から用人の渡辺忠蔵と地方掛りの大島林右衛門が佐原村に下向し、しばらく滞在して堤防の見廻り等を行った。そして、八月一日に地頭所から新田百姓に対して「御救米拾五俵」が下され、八日には本田堤の水防に出精した。「御褒美」として銭二五貫文、新宿堤の一部が大破したのをよく防いだという「御褒美」として銭七貫文が下された。また、この日、忠敬は本宿組の名主を仰せつけられた。伊能家は、忠敬入夫以前に不幸が続いていたため長く名主役を休んでいたのだが、ここでもようやく四〇年ぶりにまた名主をつとめることになったのである。

ところで、その二年後、天明三年に、関東一帯はまた大きな災害に

見舞われた。佐原村も、もちろん、それをまめがれることはできなかった。

天明三年八月出水七月砂降凶作付御地頭所江御検見入相願候所  
八月御知行掛秋庭次郎右衛門殿御下向<sup>御寄附</sup>本田新田御一覽九月十八  
日名主三郎右衛門五郎兵衛仁左衛門組頭文蔵百姓代共罷登組頭仁兵衛  
在府付同道御地頭所江罷出御掛り北河原瀬兵衛殿秋庭治郎右衛門殿  
格別之御引方被仰付下置候様相願候処至御聞届有之十月十一日夜  
秋庭治郎右衛門殿御下向<sup>御寄附</sup>本田再御検見被成下御伺之上隣村  
近郷ニ無之誠ニ御憐愍を以屋敷定免田畑皆無ニ御引方被為仰付  
其上為御救金百両被下置一同難有奉存則左之通御請書奉差上候

### ○解説文

同三年五日出水七月砂降凶作付御地頭所江御検見入相願候所

八月御知行掛秋庭次郎右衛門殿御下向<sup>御寄附</sup>本田新田御一覽九月十八

日名主三郎右衛門五郎兵衛仁左衛門組頭文蔵百姓代共罷登組頭仁兵衛

在府付同道御地頭所江罷出御掛り北河原瀬兵衛殿秋庭治郎右衛門殿

格別之御引方被仰付下置候様相願候処至御聞届有之十月十一日夜

秋庭治郎右衛門殿御下向<sup>御寄附</sup>本田再御検見被成下御伺之上隣村

近郷ニ無之誠ニ御憐愍を以屋敷定免田畑皆無ニ御引方被為仰付

其上為御救金百両被下置一同難有奉存則左之通御請書奉差上候

「五月出水七月砂降凶作」とあるが「砂降」とは浅間山の大噴火による災害のことである。そのときの有様は『武江年表』に、次のように記されている。

「信州浅間山火坑大いに焼く。江戸にては七月六日夕、七時半より、西北の方鳴動し、翌七日猶甚だし。天闇く夜の如く、六日の夜より関東筋毛灰を降らす事夥し。竹木の枝、積雪の如し……六日夕方より青色の灰降る。夜中より翌七日の朝、大いに降り、鳴る音強く、昼過ぎになり、掛目二十匁より四十匁位迄の軽石の如き小石降り、更に歩行ならず……」（平凡社刊『増訂武江年表1』）

関東に於ては、この浅間山の噴火と諸河川の出水による凶作が、いわゆる天明の飢饉の序曲となったのであるが、この時も、地頭所の津田家は、佐原村に対して手厚い配慮を示したのである。前に掲げた記事を見ると、佐原村から地頭所へ「御検見入」を願ったところ八月に知行掛りの役人が下向して本田新田を見廻り、九月になつて名主三郎右衛門（忠敬）が他の組の名主や組頭・百姓代と共に地頭所へ出頭して年貢について「格別の御引方」を願ったところ、十月に、また知行掛りの秋庭治郎右衛門が下向して本田の再検見を行い、地頭所の意向を聞いた上で、当年の年貢は屋敷は定免だが田畑は「皆無」に引いてくれたばかりでなく「御救金百両」を下されたというのである。

前々年の出水のときも、「御救米」や「御褒美」を下さつたばかりか、今度は、一度願つただけで田畑の年貢は皆無引き、おまけに「御救金」を一〇〇両もくれたのである。まことに、大へんな「御憐愍」である。だが、これには、わけがあったらしい。右の記事のすぐ前に、細字で次のように記されている。

但去丑年十月、渡辺清蔵殿大島林右衛門殿御下向、津田村内身元相応えものへ御勝手御入用金千両被仰付候、右之内五百両ハ永沢治郎右衛門三百五拾両ハ小前より百五拾両三郎右衛門より差出候、同二寅ノ暮次郎右衛門<sup>正</sup>金三百五拾両三郎右衛門<sup>正</sup>金百両御返済被下候

「去丑年十月」、即ち天明元年十月、津田家は佐原村内の「身元相応えもの」に対して、「御勝手御入用金」として一〇〇〇両を差し出すよう要求した。そのため、永沢治郎右衛門が五〇〇両、三郎右衛門が一五〇両を負担し、あとの三五〇両は、永沢・伊能以外の「小前」のものがたちが差し出した。津田家は、翌年に、その借り入れ金のうち四五〇両（永沢へ三五〇両、伊能へ一〇〇両）を返済したという。だが、もう少し先の方を読んでいくと、津田家は右の借金を返済しきれないうちに、天明三年には、また佐原村から一五〇両を借り入れている。利息は、月二〇両につき一分の割、つまり年に一割五分である。

このようなことと考えると、天明三年の凶作にあたって、地頭所津田家がすぐに田畑年貢の全額免除を行ったり、「御救金」一〇〇両を出したりした意味がわかるような気がする。津田家は新しい地頭所としての体面を保持しようとしたこともあるが、それよりも佐原村から多額の借金をしてまだ返済しきれないでおり、先々も借金をする都合もあるので、この際、特別の「御憐愍」を見せたのではあるまいか。事実、この後も、津田家はしばしば佐原村に借金を申し入れているのである。

天明四年には、伊能・永沢両家から「御扶持米」を借りており、その証文の写しが載せられているので、次にお目に掛けよう。



足

一、米貳百七拾俵者

伴に申入

是より二月七月八月三月分御扶持米壹ヶ月  
米九拾俵宛毎月納但米代金利足は月式拾兩壹分

右、沙路より入用三ヶ月分御扶持米  
書面之通度用申所実正也、尤米直段之儀ハ  
米納候節之相場を以此方より差図次第  
相納可被申候、右返済之儀は当辰秋佐原村  
御物成米之内当冬江戸御拂米平均  
直段を以元利分儀數米ニ而相渡し可  
申候間於佐原村請取可被申候、仍如件

右は御勝手御入用三ヶ月御家中御扶持米  
書面之通借用申所実正也、尤米直段之儀ハ  
米納候節之相場を以此方より差図次第  
相納可被申候、右返済之儀は当辰秋佐原村  
御物成米之内当冬江戸御拂米平均  
直段を以元利分儀數米ニ而相渡し可  
申候間於佐原村請取可被申候、仍如件

天明四甲  
氏六月

秋庭次郎右衛門  
北河原 瀬兵衛

伊能三郎右衛門殿

永沢治郎右衛門殿

天明四甲  
氏六月

極座以命  
北河原瀬兵衛

伊能三郎

永沢治郎

○解説文

覚

一米貳百七拾俵者

但し四斗入

是は六月七月八月三ヶ月分御扶持米壹ヶ月

米九拾俵宛毎月納但米代金利足は月式拾兩壹分

津田家は、六、七、八月分の扶持米給与のためとして、伊能・永沢  
両家から二七〇俵の米を借り、その返済は、その年の冬に佐原村から  
上納する年貢のうちから行うことにしたのである。秋庭次郎右衛門、  
北河原瀬兵衛とあるのは、津田家の用人である。このときから、伊能  
家の江戸鎌倉川岸出店と永沢家の小網町出店は、「御知行所御收納米蔵  
元」を仰せつけられた。

ところで、さきに記した天明元年の「御勝手御入用金」では、一〇  
〇〇兩のうち、永沢治郎右衛門が五〇〇兩さし出したのに対して、三  
郎右衛門は一五〇兩であった。金額に大きな差がある。だが、このこ  
とは、そのまま永沢・伊能両家の財力のちがいを示すものではあるま  
い。前にも記したように、伊能家では、この年、忠敬が四〇年ぶりで  
名主役についたばかりであったが、永沢家の方は、二〇年余り前に公  
儀から苗字・帯刀を許され、村役でも名主上座の村方後見という地位  
についていた。そのような立場の差が、「御入用金」の負担額にも反映

していたのではあるまいか。しかし、伊能家も、そのままではたけではない。忠敬は天明三年に地頭所から苗字・帯刀を許され、翌年八月には、早くも地頭所に願って名主役を退き、永沢家と同様に村方後見を仰せつけられた。

これまで述べてきたのとは別のことであるが、ここで、ちよつと触れておきたいことがある。前回、『金鏡類録』の編集者は忠敬の長男景敬であることが、その証拠ともいってよさそうな表現が、第二冊に入って、はじめてあらわれる。忠敬が名主役に就くまでの伊能家の状態を説明した中に「本宿組名主の儀は祖父三七郎相休……」と記したところがある。三七郎というのは、忠敬の妻ミチの父、伊能長由のことである。従って、この文章を書いたのは、長由の孫であり、忠敬・ミチ夫妻の長男景敬であるといつてよからう。但し、このことだけで『金鏡類録』全体の編集が景敬によって行われたと断定するのは早計かと思われるので、この問題については、なお引きつづき注意していきたいと思う。



さわらへござれ

夏祭り・7月

秋祭り・10月

「佐原の山車行事」

重要無形民俗文化財指定を答申



新春の注連縄（しめなわ）

大友正道

ムラの境に魔除けとして置かれる「道切り」は、近江では「勸進帳」と呼ばれ、あちこちに様々な形がありました。

上の写真は昨年取材した野洲町行畑の行事神社のものです。

今春も近江を再探訪したい程、大変幻想的で魅力的でした。

これぞ忠敬の墓碑銘拓本

植田浩一

「伊能忠敬研究」第三四号にのつた忠敬墓碑銘の拓本、大きさが適当で見事な出来栄です。これがあれば、先賢と仰ぐ大谷亮吉も保柳睦美も、又、世の研究者も、誤字を伝えることはなかったと思います。

先に墓碑銘について書くようにいわれましたが、私の関心は碑文の字体についてでした。例えば現用字体の明という字は銘文中に三回使われていますが、いずれも明という字体、同じように解という字は二カ所とも解、その他齡は齡（齡ではない）、尽は盡（盡ではない）、越は越（戊でなく戊Ⅱボウ）に書かれている。これらの字体が現用の機械に普通にあるとは思えません（私は活字メディアに多年、在籍しておりまして）、それでこれは記事になりにくいから墓碑の拓本があればすべて明示できることと考えておりました。それが今回実現したので嬉しく思っている次第です。

## 外国の文献のなかの忠敬先生

秋間 実

まえがき

「研究会の会員であるからには、いつの日にか会誌『伊能忠敬研究』になにか研究論文かエッセイかを寄せたいものだ」とつねづね夢見てきました。しかし、現実にはいつまでもヨーロッパとくにドイツの歴史や文化わけでもその哲学や自然科学思想などの研究から足を洗うことができない身、つまり、いつになっても忠敬先生研究の実績を積み重ねることができない身、どうしてそのような文章が書けましようか？ あきらめるほかありませんでした。

さきごろ、しかし、重ねて執筆要請を頂いたさいに、苦慮したあげく、敢えて「窮余の一策」を講じる一大決心をつけました。それは、外国人が書いた標準的文献（百科事典や自然科学史書・技術史書など）に忠敬先生が登場しているケースがあれば、それを日本語に翻訳し——必要があれば注や解説などを添え——て会員諸兄弟のご参考に供する、ということです。つまり、他人のなにやらで相撲を取る、ということですね。

そのように決めてからというものの、さしあたり地元の二つの公立図書館でいろいろ探しましたが、残念ながら、なにも見つかりませんでした。たとえば『ブリタニカ大百科事典』にも『アメリカナ大百科事典』にも、忠敬先生のことにはなにも出ていないようです。（一）「どうも今回は、二十年まえから見知っているドイツの或る自然科学史書の忠敬先生を称揚した一つの箇所、これを取り上げることで責め

を果たすことにするほかないのではないか」と思い定めかけた折りも折り、幸いにも、不思議なご縁で結ばれている尊敬する津田靖久・工学博士（成城コンサルティング事務所）が、お忙しいなか、インターネットで忠敬先生について世界じゅうを検索して、おもしろいサイトを二つ見つけてくださいました。一つはインドのもの、もう一つはブラジルのものです。前者はイギリス語の、後者はポルトガル語の、テキストです。ありがたいことでした。そこで、今回は、ドイツとインドと、この二つの記事をご紹介しますことにします。

（一） 日ごろ座右に置いて重宝しているポケット判全二十巻のドイツの『ブロックハウス百科事典』（一九八四年）の第八巻には、たしかに「Ito」という項目がありますが、これはギリシヤ神話のなかの一女性の名まえだそうで、伊能家にはまったく関係がありません。

### 一 関 孝和と並び称されて

はじめに取り上げるドイツの自然科学史書とは、一九八三年につまりドイツ統一以前に東ドイツはライプツィヒで出版されたハンス・ヴーシング編による大判で五六四ページの大冊『自然科学の歴史』(*Geschichte der Naturwissenschaften*, hrsg. v. Hans Wussing, Edition Leipzig 1983) のことです。

この本の一つの特徴は、ヨーロッパ偏重をしりぞけて、ヨーロッパ中世の数学・自然科学の状況を叙述するに先だって、コロンブス到達以前のアメリカ、インド、中国と日本、イスラーム諸帝国、こうした地域・国ぐにの諸民族が自力で発展させてきた数学・自然科学の豊かな成果に光をあてている、ということでしょう。話が二十世紀

はじめに及んでいることもあります。日本については、編者ヴーシング自身が徳川時代を中心に一二二ページから一二四ページにかけて述べており、そのなかに忠敬先生のことなどがただ約三行だけとは言えてくるわけです。

以下、その箇所（ゴシック体の印刷にします）を含めて、明治維新前夜までの日本の封建時代における数学・自然諸科学の発展を概観した三つのパラグラフ（日本全体で五つのパラグラフのうち）を訳出して（「……」はわたしの加筆部分）、お目にかけることになしましょう——

「日本の封建時代——一九二二年〔源頼朝が鎌倉幕府初代將軍になつて武家政治を創始した年〕から一八六七年〔いわゆる大政奉還・王政復古の年〕までとされている——には、日本はさまざまな強さの中央権力による武士階級独裁のもとで、高い農業生産性を達成した国であり、高度の文化をもち、いくつかの科学分野を自力で発展させた国であつた。ヨーロッパでニュートンとライブニツとが微積分学をつくり出したのと同じ時代に、関孝和〔二六四二—一七〇八〕は、積分算の諸方法を開発し〔二二一—二二二ページに一例が示してあります〕、無限級数を用い、もろもろの方程式体系を解くにあたつて行列式に似た諸表現を使った。仏教寺院は、その信徒たちに伝統に従つて数学の問題を出し、これをポスターで公示した。みごとに練りあげられた手動計算機そろばんも、この時代の数学の成果の一つであつた。植物学は、医学とのつながりで、驚くばかりの高みに達した。天文学および暦づくりも同様である。新しい植物たとえばサツマイモは、農業に取り入れられた。〔不燃性の〕石綿服を着用することは、冶金のなかで行なわれるようになった。伊能〔Udo〕とあるのを訂正します」忠敬〔一七四五

—一八一八〕の〔指揮の〕もとで十八世紀の終わりに行なわれた日本の島世界の地理学的測量は、非常に精確であつたから、十九世紀のイギリスの地理学者たちには、もうなにも改良できるところがなかった。ちょうどコペルニクスが死んだ一五四二／四三年に、日本人ははじめてヨーロッパ人と接触した。すなわち、ポルトガルの船乗り三人が日本の沿岸に漂着したのである。まもなく日本で鉄砲が使用されるようになった。賢明で断乎とした〔鎖国〕政策のおかげで、この国は、植民地化をまぬかれることができた。ただオランダの商館だけが、日本で本意ながら許されていた。十八世紀なかば以降、ヨーロッパとくにオランダの自然科学と医学とのいくつかの成果が、キリスト教と結びついていなければ、注意ぶかく受け継がれた。軍事故権〔＝徳川幕府〕が命じたこの運動は、〔蘭学〔Rangaku〕〕と言われた」。

「自前の諸業績と外来の諸業績とが混じり合つた結果、日本でゆつくりとではあるが絶え間のない自然諸科学の高揚が惹き起こされた。たとえば、一七四七年には植物学事典がつくられたし、一七七四年にはコペルニクス天文学がはじめて現われたし、一七八四年にはニュートンの重力理論が論じられたし、日本の科学者たちは、一七九九年から静電気機械・温度計・望遠鏡を組み立てたし、一八〇五年には乳がんの手術にあたつて世界ではじめて全身麻酔を実施したし、一八三七年にはラヴオアジエとドールトンとの近代化学がかれらに受け継がれた、というぐあいである」。

「その間に日本は、十九世紀のなかば、外交政策上、植民地保有諸国の圧力にさらされることになった。アメリカ合衆国は、〔一八一八〕六〇年代に日本に強制してついにものろもろの港を開放させ通商協定を結ばせた。そのさい、軍事力のデモンストレーションと並んで、自然科学にもとづいた技術——蒸気船、機関車、電信——の披露もまた、本



質的に重要な役割を果たしたのである。こうした状況と重大な経済上内政上の危機とが重なった結果、一八六七/六八年に武士階級独裁の転覆と天皇の権力の再建と（「明治維新」と言われる（……））がもたらされ、ついには急速な資本主義的経済体制づくりが始まることになった。

以上の叙述を読むと、「忠敬先生は二番目のパラグラフで扱ったほうが適切ではなかったのか」という気がしますが、これについては控えましょう。ここで注目していただきたいのは、なによりも、関孝和と伊能忠敬というただ二人の名前しか右に挙げられていない、ということです。数学家ヴァーシング（2）が関になみなみでない関心を寄せているのは当然ですが、忠敬先生はそれと並び称されているわけで、ヴァーシングがかれにきわめて高い評価を与えていることが、これでわかるのです。

（2）この機会に、わたしの知友でもあった筆者ヴァーシング教授に（この、最近の人物事典（H. Müller-Ebergs et al. (Hg.), *Wer war in der DDR: Ein biographisches Lexikon*, Ch. Links Verlag Berlin, 2. Aufl. 2001）に載っている、簡単に紹介させてください）。

一九二七年にザクセン州はヴァルトハイムに生まれ、一九四七年から一九五二年までライプツィヒ大学で数学と物理学とを勉強しました。一九五七年に代数学にかんする論文で博士学位を取得し、世界的に有名なライプツィヒ大学付属ズートホフ医学史自然科学史研究所で働きはじめ、一九六六年には、群論の歴史にかんする論文で大学教員資格を得て、講師になります。一九六八年か

ら二十四年間、カール・マルクス大学（ライプツィヒ大学）で自然科学史の教授を勤め、一九九二年に退職しました。数学家・自然科学史家として国内でも国際的にも高く評価されています。国内では長くズートホフ研究所長でしたし、国際的には、一九八一年から一九八九年まで、国際科学史科学哲学連合（IUHPS）の事務総代理を、一九八九年から一九九三年までは、同会長代理を、それぞれ務めた、ということです。——以上が、人物事典の告げるところです。

この間、一九七九年には、東京工業大学の道家達将教授の招きで同大学客員研究員として来日し、おもに東京で数ヶ月にわたり研究生活を送りました。当時は目黒区八雲にあったわたしの勤務先、東京都立大学と、同じ目黒区の大岡山にある東工大とは、地理的に近かったうえに、自然科学史・技術史の研究および教育という点で人的交流もさかんでしたから、わたしも自然にヴァーシング教授と知り合いになりました。いちど氏が都立大の大教室でフランスの数学者ガスパール・モンジュ（一七四六—一八一八）——それまでに名まえさえ聞いたことがありませんでした——の画法幾何学（géométrie descriptive）について公開講義を行なったさいには、——どうしてそういう奇怪事にたちいたったのか思い出せませんが、——なんの予備知識もない内容を原稿ぬきでその場で通訳させられて、閉口しました。が、電気通信大学でやさしい教養講義を原稿つきで楽しく通訳したこともありました。このほかにもよく会う機会があつて親しく懇談しました。ドイツ民主共和国（当時）における学問研究と大学教育とのありかたが、話題の中心になっていた、と思いますが、氏は、自国の政治体制をほめ



もしなければなしませんでした。ものしずかな学者らしい人柄で、なによりも数学とその歴史とを熱愛し、政治は性に合わない、という印象でした。それと関連があるのかどうかはわかりませんが、史的唯物論(唯物史観)を数学史の研究また叙述の方法に適用することには乗り気でないようでした。この点でこちらから論戦を挑むことはしませんでした。

そうこうするうちに、同年輩ということもあってか、友情が深まって、ずいぶん仲よくなりました。その帰国後、一九八〇年夏にわたしが世界科学者連盟(WFSW)の総会およびシンポジウムに日本科学者会議代表団の一員として参加するために東ベルリンへ出かけたさいには、わざわざライプツィヒから夫人とともに旧式な小型乗用車を駆って会いにきてくれ、お互いに再会をよろこびあったものでした。その後も文通が続き、『自然諸科学の歴史』入手後には、右の訳文で指摘したミスプリント(「伊能」が「Ino」になっている)と、もう一つ、公害問題を論じている箇所(五二二ページ)で「水俣」を「ミナマタ(Minamata)」としているミスプリントとを見つけたので、すぐに手紙で指摘したところ、「いまましい、残念」とくやしがつた返事が折り返し届きました。そのあとの交流については、省略します。

## 二 ニートンらとも並び称されて

つぎに取り上げるのは、インドの「教育サイト」と思われる [zelearn.com:The Complete Learning Portal](http://zelearn.com:The Complete Learning Portal) に津田靖久さんが見つけたくださった「昔の数学者たち(創始者たち)(Mathematicians of Yester Year (Founding Fathers))」というコンテンツです。ここには十四人の名が挙がっていて、その一人ひとりに簡単な(のんきな?)

気らくな?)説明が付いています。まず、名まえ「現地読みに近づけました」と生没年とを書きうつしておきますと――

タレース	(前六二四―前五四六)
ピュータゴラス	(前五八二―前四九三)
エウクレイデース	(前三〇〇ごろ)
アルキメデース	(前二八七―前二一二)
レオナルド・ダ・ヴィンチ	(一四五二―一五一九)
コペルニクス	(一四七三―一五四三)
ガリレオ	(一五六四―一六四二)
デカルト	(一五九六―一六五〇)
パスカル	(一六二三―一六六二)
関	(一六四二―一七〇八)
ニュートン	(一六四二―一七二七)
ライブニツ	(一六四六―一七一六)
忠敬	(一七四五―一八一八)
ガウス	(一七七七―一八五五)

十三人目の Tadataka は、もちろん、Ino でなければなりません。Ino が名、Tadataka が姓、と勘ちがいされてしまったのですね。Saki Tadakuza が正しく「関」と表記されているのと対照的です。これは、関のほうが有名だ(国際的にも知名度が高い)ということによるのかもしれません。

それはともかく、これはすばらしい――と言うか、驚天動地の――名簿です。「天下の奇観」と言ってもよいのかもしれない。なにしろ、忠敬先生が、関と並び称されているばかりではなくて、じつにユーク

リッドやニュートンやライブニッツやガウスなど世界的に著名な数学者たちとも——また、コペルニクスやガリレオなど大自然科学者たちとも——並び称されているのですから。きつと忠敬先生ご自身もびつくりなさっているにちがいありません。

続いて、ご参考までに、関孝和とわが忠敬先生とについてここで述べられているところを訳出しておくことにします。

まず、関孝和について——

「関孝和は、積分算のパイオニアであった。かれの時代には、中国の数字「漢数字」が用いられていた。「算木(Sabaki)」という名の木製の特殊な道具も利用された。かれら「と複数になっています」の数字は「和算(Muromachi)」と名づけられていた。関は、いちばんよく知られた和算家たちの一人であった」。

つぎに、伊能忠敬について——

「伊能忠敬は、日本の或る下級カースト農民の子で、独力で勉強した。十八歳のとき、伊能という名の商人の養子となって、働くために勉強を中止しなければならなかった」。

「四十九歳で、息子に家業を継がせて、或る先生のもとで勉強を再開した。天文学・数学・歴史・測量法を習った。五十五歳で、政府から日本の北部を測量する許可をもらった。全世界の地図「複数」をつくるために情報集めを続けた」。

日本全土の測量・地図作製の完了という忠敬先生の偉大な達成にまでは話が進まず、なんともポイントがぼけた説明で、残念です。それに、「ただこれだけの記述では、忠敬先生を数学の創始者たちの一人と見なすわけにはいかないのではないか」と考えられますが、そのあたりはどうなっているのでしょうか？

\* \* \* \* \*

最後に、この小文の執筆中にしきりに心中を去来した一つの思いを書きとめて、結びに代えます。——忠敬先生にかんする最新のみごとな包括的著作 渡辺一郎編著『伊能忠敬測量隊』(小学館をなんとかイギリス語に訳してイギリスかアメリカかのどこかの出版社から刊行する、ということがもしできるのなら、広い範囲の外国人に忠敬先生の生涯と事業についてもっとよく知ってもらいたいへん役に立つであろうに。

(あきま みのもる・東京都立大学名誉教授)

□「勇弘(八王子)千人同心」像―苫小牧市市民会館前庭



この銅像は苫小牧市開基百年記念碑として昭和四八年に建立されました。会員の堀江敏夫さんが市の担当者として思い出の銅像です。

\*企画展「八王子千人同心―その生活と文化」開催

東京都八王子市郷土資料館にて2/14〜3/14

## 伊能忠敬と菅茶山の会談について

菅波 寛

伊能忠敬第七次測量の日記によれば、文化六年（一八〇九）十一月二十七日に、山陽道備後神辺驛止宿について次の記述がある「神辺驛止宿本陣菅沼（注、菅波が正しい）武十郎、福山儒臣菅太仲え会談……」とあり、次いで神辺の故事を十項目書き留めてある。

菅太仲（中）（一七四八—一八二七）。儒者。名を晋帥（しんすい）、字は禮卿、通称を太中、号は茶山である。神辺驛には東本陣と西本陣と二軒あり止宿本陣は、東本陣本庄屋菅波武十郎で、菅茶山の父久助が養子で入り、やがて別居して酒造業と農業を営む傍ら、風流韻事を樂しみ、とくに俳諧を嗜みその居を「三月庵」と呼称した。茶山は父の没後の喪明けにその俳諧資料を収集して句集「三月庵集」を刊行し縁故交遊関係者に贈呈した。茶山は京都遊学の後天明元年（一七八一）神辺驛で私塾を開設し、のち藩の郷校として経営基盤を安定し「廉塾」と呼称した。茶山の学風を慕い東北より九州迄各地の勉学の徒が入塾した。また田園詩人としての漢詩の趣きは著名である。

茶山自筆の「廉塾日記」（原本は未公開なるも、そのコピーを富士川英郎氏に交付され、同氏の著作「菅茶山・一九九〇年五月発行・盤福武書店」に和文翻刻された）の記述によれば「二十七日、晴、伊能勘解由を本陣に見る門人二人出て見ゆ。伊能、鄭註考經一部、菓子、二字扇を恵む。留談夜に至る。これより先き、勘解由、しばし語を寄

せて、余を見んと欲す、しかれども公程制有るを以て、往きて見ることを得ず……」と記述あり。その記述中の「鄭註考經」は「補訂鄭註考經（後漢の人・鄭玄の經書の註解を部分的に補訂した書物）で伊能氏の友人で地図作成に協力した、下総国の儒者久保木竹窓の著書である。

茶山は会談の翌日の二十八日付で「書補訂鄭註考經後」と題してその跋文を書いた。この全文の書き下し文は「森銑三著作集・第五巻・人物編五・伊能忠敬。昭和四十六年三月発行・中央公論社」に詳記されている。その書き下し文は次のとおりである。

『六年前、予東都に在り。夏五月常陸に遊び、舟して刀棚川を下りて佐原より歩いて香取祠に謁し、鳥居干（かし）に至りて漁戸に午飯するに、門に對するの一舎竹籬茅欄、瀟洒愛すべし。以て僧侶の隠棲する者と爲して、意とせずして去る。今茲己巳、伊能先生測量與圖の事を以て國郡を巡行して、路神邊を遇ぐ。因りて予を見むことを求め、既にして恵むに此の書を以てせり。下総人窪木仲黙、名は清淵。竹窓と號する者の著す所なりと。乃ち其の人と其の居とを問ひ。因りて談予が舊遊に及びて而して鳥居干に見る所は、即ち其の竹窓と號する者なりしことを知れり。帳然之を久しうす。跋尾餘白あり。遂に記して以て弄（おさ）む焉。先生名は忠敬、勘解由と稱す。下総佐原の人なり。文化六年冬十一月二十八日菅晋帥』

なお文中六年前予東都に在りとは文化元年（一八〇四）藩主の命による江戸行きで、正月二十一日神辺発程、江戸在中の五月に常陸に遊び、香取の鳥居干で見かけた瀟洒な茅屋が実は久保木竹窓の邸宅であったことを伊能氏に教えられて、その偶然の奇に驚いたのであった。会談の後茶山は伊能先生に贈るとして、七言律詩『伊能先生奉命測量諸道行次見問賦贈』と題して作詩した。

その詩の解説文は次のとおり。

菅茶山詩・七言律詩

『伊能先生奉命測量諸道行次見問賦贈』

(伊能先生命を奉り諸道を測量行次いで見え問い賦して贈る)

酒肆藏名臥故邱

豈圖幕檄命飛輪

璿璣坐括三千界

分率行量六十州

已識馬援能聚米

不從楊炯問浮舟

奚囊我亦収河収

愧把生涯供漫遊

しゆしなをおさめ こきゆうにふす

酒肆名を藏め故邱に臥す

あにはからんや ばくげきひしゆうをめいぜんとは

豈圖らんや幕檄飛輪を命ぜんとは

せんきざして かつさんぜんかい

璿璣坐して括す三千界

わかちてひきい こうこうはかるろくじゆうしゆう

分ちて率い行々量る六十州

すでにしる ばえんよく こめをあつめるを

已に識る馬援能く米を聚るを

ようけいにしたがいてふしゆうをとわず

楊炯に従いて浮舟を問わず

けいのうわれまたかがくをおさむ

奚囊我亦た河岳を収む

はじらくはしょうがいをとる まんゆうにきようせしを

愧らくは生涯を把り漫遊に供せしを

語注・幕檄：幕府の命令。

飛輪：軽く飛びまわる。

璿璣：天文を測量する機械。

括す：まとめる。

馬援：後漢、茂陵の人。後漢の建武中、伏波將軍となり、交趾

を征服し、これを平ぐ。馬援が老年、鞍によつて猶元氣

があるを示した故事がある。

楊炯：かわ柳の鮮やかな光。浮舟：舟を浮かべる。

奚囊：詩を入れる袋。

河岳：黄河と中国の国の鎮めとして尊んだ五つの名山。

漫遊：氣のむくまゝ、方々を旅行して歩くこと。

大意・伊能先生は、酒店を次世代に譲り、隠居の身となり故郷の山河

を供とせん。はからずも幕命により飛び回るとは。測量具と共に

に坐して広い天地を纏める。分担して率い、行くく計測する

は日本全国。已に知っている馬援の故事を。

川柳の鮮明な輝きに從つて舟を浮かべるを厭わず測量行。私も

詩囊に中国の名勝たる黄河と五岳にちなんだ風景を詠じて収め

よう。恥ずかしく思うは、我が生涯をかけて、伊能先生の如く

全国を漫遊してみたい。

出典・黄葉夕陽村舎詩 後編卷三六所収

作詩年代、文化六年・茶山六十三歳

(すがなみ ひろし・郷土史家、福山市)

# 「加賀藩測量二百年」の年を終えて

河崎 倫代

伊能忠敬は一八〇〇年の蝦夷地測量から一八一六年の江戸測量まで、十七年間にわけて全国を測量しました。そのため、二十一世紀の日本列島に生きる私たちは、毎年どこかで「伊能忠敬測量二百年」に出会うことができます。

昨年二〇〇三年は「第四次測量二百年」、すなわち「加賀・能登測量二百年」の年でした。そこで、ささやかですが、石川支部で取り組んだことを報告します。いろんな方に教えていただいたり迷惑をかけたりで、なかなか思い通りにならなかった一年でしたが、これから「二百年」を迎える地域の会員に、何か少しでも参考になればと思います。

## 一、四月十六日、「伊能忠敬・加賀藩測量二百年展」開催

第四次測量隊は、享和三年二月二十五日に江戸を出立しました。太陽暦一八〇三年四月十六日です。そこでこの日、インターネット上に「伊能忠敬・加賀藩測量二百年展」を開催しました。ホームページを開き、江戸出立から帰着までの二一九日間を、測量日記と地図等で紹介するという企画でした。長崎の入江正利さんの「伊能忠敬の長崎市測量」に感動して、入江さんに教えを乞いながら始めたのですが、パソコン能力と時間がともなわず、今もって苦戦中です。ご覧くださった方もいらつしやるでしょうが、次に、そのホームページの一部を紹介します。

第4次測量隊員 1/2 ページ

第4次測量に参加した隊員はどんな人？

伊能忠敬(1745-1818)	平山源蔵(1779-1819)	村津大光(1797-1831)	小野良助(1763-1831)
			
59歳。上野国(千葉県)山田郡小幡村に生まれる。17歳で下野国(栃木県)寄附郡佐野村の伊能家の養子となる。30歳で家督を継ぐ。長崎参府参事となる。59〜71歳まで全国測量をおこなった。	24歳。下総国(千葉県)寄附郡中村の人。第2次〜5次測量に参加し、川内参府の全測量に参加した。測量参加日数は合計1233日である。	年齢不詳。奥州郡馬場村の人。第4次測量のみ参加した。	40歳。上野国(千葉県)大塚村の人。第4次測量の測量を終えて江戸へ戻る途中、病没のため途中で測量隊と別れて旅路に帰った。
伊能秀康(1769-1838)	寄附殿(1768-1836)	下僕・伊能百兵衛	下僕・久兵衛
			
17歳。忠敬と2番目の妻との間に生まれた次子。第1次〜4次測量まで参加。新潟県・本州の伊能家、四国松山を測量。測量参加日数は合計1760日である。	17歳。のちの徳川慶喜。第2次〜5次、8次測量に参加。本州の伊能家と九州の第1回測量に参加。のちに徳川慶喜の前で「豊後白旗」を掲げた。忠敬の測量方法と測量器具について詳しく、測量参加日数は合計1748日である。	年齢その他、不詳。	年齢その他、不詳。
目次	目次	目次	目次
江戸参府	新潟県	静岡県	愛知県
岐阜県	富山県	石川県	福井県
滋賀県	京都府	大阪府	兵庫県
奈良県	和歌山県	徳島県	香川県
高松市	愛媛県	高知県	福岡県
佐賀県	長崎県	熊本県	大分県
宮崎県	鹿児島県	沖縄県	

http://www.grook.com/jp/kukawashi/tain.htm 2003/12/24

第四次測量隊員の紹介一絵は笹島民子さん。

伊能忠敬・加賀藩測量200年展 1/1 ページ

## 伊能忠敬 加賀藩測量200年展

期間：2003年4月16日〜12月31日



忠敬先生御像(部分)  
青木錦次郎/画  
(富山県立歴史博物館蔵)  
(伊能忠敬記念館蔵)

伊能忠敬の測量に用いた赤子の青木錦次郎が描かれている。

一お詫びー  
伊能忠敬は本名ならぬ、伊能忠信と云う人、あつたと思つてゐることを、ここに訂正いたします。  
何となく、年輩には江戸で書ける字の練習のつもりで、がんばります。

あなたは  
入籍者です

皆さん、ようこそお越し下さいました。  
ここでは、ただ今「伊能忠敬・加賀藩測量200年展」を開催しています。せまい会場ですが、どうぞお楽しみ下さい。  
さて、皆さんは「伊能忠敬」のうたがたかを知っていますか？江戸時代の終りころ、全国を測量して日本列島の正しい形をわけて地図にあらわした人です。17年間で10回の測量旅行に出て、約3万5千kmを歩きました。地球をほぼ一周したことになります。私たちの住む日本列島を測ったのは、今からちょうど200年前の享和3年(1803)のことです。  
そこで、石川県に住む小学校高学年・中・高校生と皆さん、伊能忠敬の加賀藩測量の様子や、200年前のふるさと石川の姿を紹介したいと思ひ、このホームページを開きました。  
江戸からスタートしますので、第4次測量の道すじにある神奈川・静岡・愛知・岐阜・滋賀・富山・福井・山梨・新潟・群馬・栃木・茨城・千葉・東京の人たちにも見ていただければうれしいです。小学生の皆さんには少し難しい言葉や漢字があるかと思いますが、先生やお父さん・お母さんに聞いて下さい。  
それではどうぞ、最後の間までゆっくりご覧下さい。

お読みください 目次へ

ホームページの表紙





神谷一郎氏の掲載許可をいただきました。

第4次測量・加賀藩での食事は？	
<p>「一汁一菜」どころじゃない、海・山の幸の並んだご馳走だったようだ。これは第8次測量だから、完全に「幕府御用」としてもなされた時のものである。</p> <p>では、忠敬の個人的事業を幕府が援助していた形の第4次測量では、どんな食事が出されたのだろうか？ 上の例よりはお粗末だったのではないかとと思われるが、幸いにも加賀藩領内で出された食事の献立が残っている。8月21日(旧暦7月5日)加賀国羽咋郡恵比村(ほくいん・ちりはま)での食事と、9月17日(旧暦8月2日)越中国射水郡水見町(みづみ)のものである。</p>	
<p>8月21日(旧暦7月5日) 加賀国羽咋郡恵比村藤兵衛宅での食事</p>	<p>9月17日(旧暦8月2日) 越中国射水郡水見町富山屋吉左衛門宅での食事</p>
<p><b>夕食</b> ご飯 汁＝すまし・巻きす・みょうがの子 向＝刺身(白蓮・より天・からし酢) 平＝玉子・あんかけ・わび 焼き物＝塩鯛 香の物</p>	<p><b>落付</b> 糸うどん・糟口したし 向＝おろし・梅・塩・なんばん・おろし大根</p>
<p><b>夜食</b> ご飯 平＝かき貝・山椒の粉 小皿＝ぼらの付け焼き 香の物 後席＝スイカ</p>	<p><b>夕食</b> ご飯 汁＝切う・初たけ・ゆきみそ 向＝刺身(伊勢アワビ) 平＝すだれ・越・白身かまぼこ・大根うけ 焼き物＝塩鯛 香の物＝煎良漬・茄子漬</p>
<p><b>朝食</b> ご飯 汁＝かき貝・青柚・大根おろし 向＝刺身(伊勢鯉・海苔・ひじき・けし酢) 焼き物＝鯛の簡切 香の物</p>	<p><b>朝食</b> ご飯 汁＝よせ豆腐・栗付にんじん・白みそ 向＝鯛色付 平＝玉子とじ色々 小皿＝香の物 お茶</p>

加賀藩での「伊能忠敬もてなしメニュー」



壇上の渡辺一郎氏(撮影・生涯学習課主事釜勇雄氏)



渡辺氏の解説で、展示された複製伊能図を見る参加者

二、八月二十六日、中島町で講演会開催

新暦のこの日、測量隊は石川県鹿島郡中島町に宿泊しました。そこで、本会の代表理事渡辺一郎氏に「中島町民大学」の第一回として「平成の伊能忠敬が中島町にやって来た！」と題する講演会をお願いしました。東京国立博物館やイギリスのグリニッジ海事博物館所蔵の複製伊能図等も展示して、中島町役場多目的ホールに集まったおよそ百二十人の皆さんに見ていただきました。この企画は、私の中学時代の恩師宮田勝雄・也寸子ご夫妻のご尽力で実現したものです。中島町教育委員会生涯学習課長村田正明氏には、大変お世話になりました。

何よりも、東京からはるばる能登まで自家用車を走らせてお出で下さった、渡辺ご夫妻に感謝申し上げます。

また、当初は中島町とその周辺の子供たちとの交流も考えていましたので、新潟県三条市での『子午線の夢』上映会で作られた模型の測量器具をお借りできないかと、会員の垣見壮一さんにも連絡をとってしました。いろいろご迷惑をおかけしました。



読み上げています。

老中「下総の国、伊能忠敬に日本国の地図を作ることを命ずる。また、苗字帯刀を許すものなり。幕府の仕事として、しかとつとめること。」

こうして江戸を出立した忠敬一行は、能登にやってきました。所口（七尾）奉行が「添え触れ」を読み上げます。

奉行「覚えーこのたび、能登半島海岸測量のため、下総の国伊能忠敬が幕府の御用で差し遣わされるので、書面の通り、馬三匹と人足五人と小舟三艘を、村々は差し支えないように差し出すべし。また、明日七月十日（新暦八月二十六日）朝六時、田鶴浜を出立し、海岸の波打ち際を測量し、中島村へといたる。午後四時、中島村組合頭与左衛門宅に到着する。宿の用意をとどこおりなくすべし。享和三年七月 所口奉行」

ここで、奉行は与左衛門に近づき、ひそひそ話をします

奉行「さて、内密の話だが、加賀藩から、伊能忠敬は幕府天文方高橋至時の弟子であつて、幕府に召し抱えられた者でないから、あえて重くあつかわなくてもよいと触れが出ている。そのことを含んで、測量隊に対して、粗末であつてはいけないが、かと言って、丁重であつてもいけない（観客席、爆笑）、そういうあつかい方をしてほしい。」

いよいよ、伊能忠敬、伊能秀蔵、香取慶助の登場です。

貞右衛門「幕府測量御用の伊能忠敬殿、海岸の測量、ご苦労様です。私は笠師村組合頭貞右衛門と申します。七尾の所口奉行様より、測量隊に協力するよう、申し渡されています。」

忠敬「あいわかった。よろしくたのみます。」

この橋は何というのか。この橋と唐島の距離はいかほどか。」

貞右衛門「舟入橋といいます。距離は差しつかえがあるので、答えられません。」（観客席、笑）

忠敬「では、向こうに見える小さな島と大きな島は何というのか。そこまでの距離はいかほどか。」

貞右衛門「机島と種ヶ島といいます。距離は差しつかえがあるので、答えられません。」（観客席、爆笑）

忠敬「では、ずっと向こうに見える山は何というのか。山の高さはいかほどか。」

貞右衛門「鉾打村の別所岳といいます。山の高さは差しつかえがあるので、答えられません。」（観客席、大爆笑）

加賀藩の内々のお触れがあり、伊能殿には、ご不快なことも多々あつたと思いますが、ごようしや願います。私はこれにて失礼します。」

これには、さすがの忠敬も

「伊能測量隊は、村々の家数、人数、米の取れ高、村の面積、村境から村境までの距離など、村や加賀藩の内情を知りたいのではない。海岸線をきちんと測量し、正確な地図を作りたいのである。」

と、貞右衛門に語ります。忠敬の真意は理解されたのでしょうか。彼が去った後、忠敬は

「幕府の御用とはいえ、気苦労の多いことだ。私も含めて八人は、これからも心していかなばならないのう伊能秀蔵、香取慶助」と、弟子たちに語りかけるのでした。

忠敬を演じるのは、五年生の瀧腰さん。女子生徒です。一語一語、噛み締めるように話す。瀧腰「忠敬。二百年前の夏の日、この笠師保小学校に近い海岸に立った忠敬の苦悩が伝わってくるようでした。」

第一幕の最後は、「忠敬の語り」となっていて、

「五十五歳から、幕府の命令で、北海道のエゾ地を皮切りに測量し、十七年間をついやした。地球を一回りするぐらい歩いた。弟子のいざこざや、各藩のさりげない非協力があつたが、測量を終えた。測量というものは、あらそいのない泰平の世、平和の世でなければできないものです。私が日本全土の測量と『大日本沿海輿地全図』の作成の大事業をなしとげられたのは、すでに亡くなっておられるが、幕府の天文方の高橋至時先生のおかげであります。私が死んだら、どうか、私を高橋至時先生のお墓のかたわらにほうむってもらいたい。」と、述懐します。浅草の源空寺に並ぶ至時と忠敬の墓を思い出して、私もしみじみとした気持ちになりました。

第二幕は五年男子による「十三代藩主・前田斉泰公の能登巡見」、第三幕は六年女子による「二宮金次郎像の建立」と続き、どの舞台も見ごたえがありました。

井田秀子校長先生をはじめ、教職員の皆様に快く迎えていただき、久しぶりの「学芸会」を楽しみました。聞くところによると、今年十月に中島町が合併して七尾市となるのに先立って、この四月からは、笠師保小学校も他の四校と統合して中島小学校となるということです。笠師保小学校最後の学芸会だったわけです。担任の横山隆信先生は、校区の歴史を生徒とともに発掘し、脚本化し、生徒一人一人の個性を生かした役割分担と指導をおこなって、生徒たちの新たな可能性を引き出していっしょにやるように見えました。

校区劇『牛ヶ谷堤の主が見た、三つのできごと』より



忠敬の質問に「差しかえがあるので、答えられません。」を連発する貞右衛門(平林さん)。その後ろは、香取慶助(垣浦さん)。



左が“瀧腰”。忠敬。右は息子の伊能秀蔵(垣内さん)。



第三幕「二宮金次郎像の建立」(壇上左より、石島さん・町居さん・高山(ま)さん・谷口さん・高山(み)さん・ハーモニカの三輪さん、前列、垣浦さん・前田君・坂口君・宮田君)(写真提供は笠師保小学校)



第二幕「十三代藩主・前田斉泰公の能登巡見」(左より、前田君・宮田君・境君)

## 五、新湊市博物館で「伊能忠敬がやって来た」展開催

二百年前の九月十八日(旧暦八月三日)、越中の放生津に宿泊する忠敬を訪ねて教えを受けた石黒信由は、その後測量器具を改良して精度を高め、加賀藩を代表する測量家に成長しました。特別展は九月十一日から十一月二十四日まで開催されました。

ところで、新湊市博物館に隣接する「道の駅」レストランに「伊能忠敬の落ち着き弁当」なるメニューが登場しました。放生津の宿で忠敬一行に出された食事が、文献をもとに再現されたのです。ご希望の方は、先に新湊市博物館を見学して割引券をもらって下さい。

## 六、悲しい知らせ

昨年三月まで、現役の土地家屋調査士として、郷土史家として、越中における伊能忠敬研究家として活躍してこられた富山県入善町の竹内慎一郎さんが、九月二十六日に亡くなられました。明治三十九年生まれの九十七歳。何回か入退院を繰り返して、その度に不死鳥のごとく復帰され、仕事に研究に情熱を傾ける竹内さんに、いつも励まされてきました。最後にいただいた六月十八日付けのお便りの中でも、加賀藩測量二百年にあたって、地元で何らかの企画をと呼びかけたこと、地元の古利の由緒調査中のことなどが、いつもの几帳面な文字でつづられていました。最後の入院はそのわずか二週間後の七月一日だったと、あとで娘さんからお聞きしました。著書は『地図の記憶 伊能忠敬・越中測量記』(桂書房)です。

## 七、最後に

最後になりましたが、ホームページ上での複製使用を許可して下さい。つた武揚堂社長小島久武氏と「学習まんが伊能忠敬」の作者神谷一郎



氏に感謝申し上げます。

本当にいろんな方々に教えていただき、お世話になり、ご迷惑をおかけして、「加賀藩測量二百年」の年を終えました。お礼とお詫びと感謝の気持ちでいっぱいです。皆様、ありがとうございます。

これからのことです。未完成のホームページを何とか完成させて、石川県内の小・中学生に見てもらい、「ふるさと学習」や「総合学習」に少しでも役立ててもらえるようにしたいと思います。

会員の皆様も、ぜひ一度、能登半島において下さい。昨年七月には能登空港が開港し、東京からはとつても近くなりました。能登の海岸線を歩けば、伊能忠敬とその業績の偉大さが、より一層、身近に感じられます。

(かわさき みちよ・金沢東高等学校、石川支部長)

ホームページ＝<http://www.geocities.jp/kukawasaki/isikawaken.htm>

### ○「林蔵祭」茨城県伊奈町で盛大に開催

10月25日、間宮林蔵顕彰会設立10周年を記念して、林蔵生誕地は茨城県伊奈町の専称寺で「林蔵祭」が開かれた。昨年顕彰会の大谷恒彦副会長などの調査で林蔵の直系子孫が北海道旭川市に住んでいることがわかり報道されていた。アイヌ民族で五代目にあたる間見谷喜昭さん父娘を招き、伊奈、東京、旭川の間宮三家をはじめ関係者が一堂に会した。林蔵の慰霊、顕彰の式典では追善法要、墓参、カムイノミの儀式、林蔵太鼓演奏とともに、喜昭氏三女くみさんがムックリ演奏を披露した。会場は地元、県外から多数の参加があり、報道では茨城新聞ほか全国紙の地元担当記者が集合していた。NHKはBSニュー

スで追善法要、カムイノミ儀式を映像で、ラジオでも報道していた。

伊能研究会の会員でもある大谷恒彦さんのお便りです。

『三つの組織を預かっていますと連絡、調整事項が多く、研究の方はかどりません。自ら課している命題として、①伊能家のルーツ（一五九〇年頃の動向）②忠敬の与えた「間宮倫宗序」がどうして忠敬側にのみあるのか③蝦夷図作成における忠敬・林蔵の実作業（下図を含め）の考証④林蔵が持ち歩いた英国製の銅で作った六分儀の正体（当時一八一〇年頃）の測量器具の実態と忠敬との関連）など少しでも解明したいと思っています。その筋道と資料探しのヒントがいただければと念願する次第です。貴会の組織運営の特長と学ぶべき点をご教示ください。小生は今、初期の伊奈関東郡代と林蔵の祖先・隼人との関連を勉強中です』



東京新聞 15年10月26日



一同に会した間宮林蔵の子孫の方々・伊奈町

# 忠敬の持病と妙薫の卵

杉浦 守邦

『医譚復刊八〇号(二〇〇三・一二)・伊能忠敬の死因』に編集部で若干加筆して転載

## 1

伊能忠敬(勘解由、東河と号す)が、九州第二次測量を終了して江戸に帰着したのは文化十一年(一八一四)五月二十二日のことだった。ここで念願の日本全国の足による測量を終った。年令は既に満六十九歳、古希に近い老境にあった。

顧みれば忠敬が、全国測量の第一回として蝦夷地の測量に出たのが寛政十二年(一八〇〇)五十五歳のとき、以来年数にして足掛け十五年、歩いた距離は三万五千キロ、歩幅六九センチとして五千万歩となる。地球を一周する距離であった。

もともと忠敬が、江戸浅草の暦局の高橋至時(よしとき)に弟子入りして、西洋式の暦学・天文を学び始めたのが寛政七年のことである。下総の国(今の千葉県)香取郡佐原村にあつて、名主、村方後見の役を長く勤めた後、隠居を願い出て、家督を長男景敬(三郎右衛門を代々名乗る)に譲って上京し、高橋の門を敲いたのが満五十歳のときであった。

居ること五年、願い出て初めて蝦夷地を踏み、その測量を遂げて、実測図を制作したのが、全国測量の始まりであった。ついで第二回測量として、享和元年(一八〇一)伊豆から陸奥までの本州東海岸と奥州街道を測量し、翌二年第三回測量では出羽街道と陸奥から越後まで

の海岸、越後街道などの測量を遂げた。翌三年には駿河から尾張までと、越前から越後までの海岸、さらに佐渡が島などの測量を終えた。これが第四回の測量で、これによって、日本東半分の沿海実測図が完成した。これを幕府に提出したのが文化元年(一八〇四)の事である。しかし残念なことに、この年一月、忠敬の恩師高橋至時は病死しており、地図作成を喜んでもらうことはできなかった。

忠敬はあらためて幕府から其の功績が認められ、幕吏に登用されて、至時の跡を継いだ高橋景保のもとで引き続き西日本の測量を命じられた。

文化二年から西日本の測量を計画し、第五回測量として二年にわたって東海道筋、伊勢から紀伊半島、それより山陽の海岸と島々、山陰と若狭の海岸、隠岐の島などの測量を実施した。

越えて文化五年には、淡路と四国の海岸の測量(第六回)を終えた。いよいよ最後に残った九州の測量に乗り出したのが、文化六年八月のことである。これが第七回の測量で第一次九州測量といわれるものである。最初は二、三年の長期にわたっても一氣に九州全土の測量を完成したい意気込みであつたらしい。

夏八月、江戸を出発、中仙道、山陽道を通って九州の小倉に入つてここで越年、翌七年正月、まず豊前から測量を開始、ついで豊後、日向の海岸、さらに大隅、薩摩、肥後の海岸、そこから熊本から大分までの街道の測量を実施したが、意外に時期を費やして一年を経過してしまい、遂に薩南二島(屋久島・種子島)、天草、肥前、杵岐、対馬等を残したままいったん江戸に帰らなければならなくなった。

測量終了後、直ちに九州の地図、大二十一枚、中一枚、小一枚を作成し、提出したが、決して満足できるものではなかった。九州の残された地域の測量が終われば日本全土の地図が完成する、これで最初の

大目標が完遂できると大きな希望を持って、最後の測量、第八回測量に出掛けたのである。

文化八年（一八一二）十一月二十五日、忠敬は江戸を出発して九州に向かった。

薩南二島（屋久島・種子島）天草・肥前・老岐・対馬、さらに五島列島等の測量を終えて、帰途中国、近畿、信州などで前回までに残した補足測量も行なつて、二年七カ月の測量旅行から江戸に帰着した。

## 2

さてこのような前人未到とも言ふべき大測量旅行を敢行した忠敬の健康状態はどうだったか。彼は若年時代むしろ虚弱な体質であつたといわれる。しかし、測量に従事するようになってから、煩健な体となり、衆に先んじて測量や天体観測にあたり、疲れることを知らない状況であつた。

ただ第五回の中国地方測量の際、「瘧疾」にかかったことがある。

瘧とは現在のマラリアのこと、当時は日本全国に地方病的に三日熱マラリアが存在していた。忠敬も高熱のため病臥を余儀なくされ、測量は配下に任せて、自分は療養しつつ隊の行く先に移動するということとを四カ月も繰り返したことがある。そのため隠岐には渡ることができなかつたが、幸い無事に測量目的は果たすことができた。

しかし忠敬六十三歳の時、文化五年一月から始まつた第六回の四国測量の頃から「痰咳の病」に悩まされるようになった。彼の残した測量日記によると、土佐の高知の辺りと伊予の宇和島辺で、それぞれ十日近くこの発作の為、病床に臥したことがある。五月二日の条に「予、此の日より持病痰にて引き籠もる」とか、土地の役人が面会にきて「予、持病不全快故に悉くとは対面なさず」といった記載がある。

幸い第七回の第一次九州測量の際は大事に至らなかつたが、その後老齢と共に、持病とも云うべき痰飲の症状がしばしば表れるようになっていたのである。

第二次九州測量に出掛ける前にも、冬になると痰の強い咳があらわれ、病臥を余儀なくされる日が続いていた。

痰飲とは漢方の表現で、痰を主兆候とする気管支ないし肺の疾患を云う。普通慢性気管支炎という。以前は慢性気管支カタルと呼ばれた。国際的には慢性閉塞性肺疾患（COPD）という。

正式の定義は、「気管支から過剰な粘液分泌を特徴とし、痰をともなつた咳が二冬連続して、少なくとも冬季三カ月間ほとんど毎日のように存在すること」とされている。

老齢の男性、それも喫煙するものに多いという特徴がある。

忠敬の場合は、「三カ月間ほとんど毎日」というような重症な所までは進んではいなかったが、冬になると痰をともなつた咳がよく出て来るようになっていたのである。

第二次九州測量にあたり、そのため佐原の留守家族の間では、忠敬の体を心配して、出掛ける前から冬支度には万全を期すよう気を使っていた。忠敬には二人の従者が同行していたので、これに『手アブリ（携帯式火鉢）、持ち炬燵（携帯式やぐらこたつ）、綿子（綿入れチャンチャンコ）、紙子（紙製防寒具）、テンの皮など』を持たせて、忠敬の用に供し寒を防ぐ工夫をしたらしい。

また旅行中度々慰問の手紙を送り、健康状態を問い合せることが多かった。忠敬も家族に心配を掛けまいとして、筆まめにこれに答えている。

佐原の留守を守っていたのは、忠敬の跡取り、長男の三郎右衛門景敬とその妻りで、二人の間には、忠敬の孫というべき、三治郎と鍼

之助という二人の子どもがいた。忠敬の手紙には必ずこの孫達についての問い合せや、成長を喜ぶ言葉がつけられている。

とくに忠敬と手紙の遣り取りをしたのは忠敬の長女の稲（いね）である。彼女は他家に嫁いでいたが、夫が亡くなったとき仏門に入って妙薫と改め、佐原の実家に帰って、家事の手伝いをしながら、実家の経営にも参画していた。兄で戸主の景敬が文化十年、四十七歳の若さで亡くなってからは、未亡人のりてと二人で一家を守り、三治郎と鏡之助の成長を助けていたのである。忠敬が最も頼りにしていたのは実はこの妙薫であった。

九州測量中、留守宅へ送った忠敬の手紙は、多くは妙薫宛になっている。その中にしばしば痰咳で悩んだことが述べられている。

忠敬の旅先からの膨大な手紙が伊能家に残されたが、現在は、千葉県が整理解説して『伊能忠敬書状・千葉県史料』として、発刊されている。以下これから引用する。数字は、同書の巻数ならびに書状番号である。

文化八年九月七日 出発を十月下旬に予定して準備にかかったときの手紙にも持病の痰のことが書かれている。

伊能三郎右衛門宛、伊能勘解由の名で（書状17-1）、「我等持病の痰も、今日漸く床離れ致し候。之により是まで其の地へ書状等大いに勞し申し候。最早全快、明日などは髪、月代も致すべきと存じ候間、御安心なさるべく候。」

しかし実際の出発は遅れて十一月二十五日となった。しかも季節が冬にあつたため、出発直後持病の再発があつたらしい。品川出発から二日の行程である東海道藤沢の宿で寝込んでしまった。回復までに十七、八日かかったらしい。十二月十七日になつてもまだ滞在してい

たと見え、この宿から妙薫にあてた次のような書状が残っている。

十二月十七日 東海道藤沢の宿で、妙薫宛東河父（東河は忠敬の号）（書状17-5）

「道中支度、勝手向き賄い方の心配感じ入り候。寒中手アプリ、持ち炬燵は大出来、甚だ寒を凌ぎ申し候。当月初めより持病痰起り候所、右の手アプリ、持ち炬燵、綿子、テンの皮にて、又寒を凌ぎ申し候。昨今は全快同前に相成り候。御案じ成さるまじく候。」

十二月初めから持病の痰が起こつた。しかし妙薫が、冬の寒さを案じて、寒中手アプリ、持ち炬燵を用意してくれたので、それが役立っておかげで早く治つたという感謝の手紙である。（測量日記では、忠敬も本隊と同行して小田原から甲州に入りまた駿河に出たことになっているが、これは後年整理清書されたもので、必ずしも真実ではない）出発早々咳痰の襲来で前途が危ぶまれたが、しかし以後は順調だったらしく、翌年三月鹿児島に到達したときの手紙では次のようにいつている。

文化九年三月五日 鹿児島から妙薫宛東河父の名で（書状17-5）

「旧冬持病の痰少々発し候ところ、十六、七日も相い掛かり、全快致し候。炬燵、手あぶり、其の外皮、紙子の衣服にて、大いに寒を凌ぎ候。痰の煉り薬の方書遣わされ、相い届き候。」

去年の冬かかった持病の痰には、治るまでに十六、七日もかかったが、その後はあなたの持たしてくれた炬燵や手あぶりのおかげで寒を凌ぎ、うまくいつている。痰に効くという煉り薬の処方も届いたといっている。

この用心が効を奏したのか、その後幸い持病の痰が再発することもなく、文化十一年五月、二年半に及ぶ大旅行を終えてなんとか無事に江戸に帰ることができた。



九州から、帰って、日本全国の地図作成に取り掛かったが、今までの宅では狭すぎるため、十一年六月には八丁堀亀島町の大きな邸宅に居を移して、多くの弟子や部下を集め計算と作図に従事させた。

しかし忠敬の体は、長年の苛酷な作業から、きわめて不良な状態にあった。持病の痰で起きることができず、病床から指図すると云う状態にあったから、作業は必ずしも順調に進まなかった。

文化十二年四月、未測量部分の補填のため、伊豆七島の測量の必要が生じて、測量隊の派遣が計画されたときも、忠敬は病床にあって、これに参加できなかった。

しかもこの時、測量隊見送りの件で、感情の行き違いもあって、次男の秀蔵(景敬の腹違いの弟)を放逐するという思わぬ問題も起こり、一層忠敬の健康状態を悪化させる原因となった。

秀蔵放逐のことは、忠敬より妙薫宛の次の手紙で窺い知ることができ。

文化十二年五月四日付け 妙薫宛 東河(書状20-1)

「扱我等病氣も逐日快方、朔日月代、二日に入湯致し、いよいよ以て平生同前に相成り候、御案じなされまじく候。

先月二十七日天気も可也にて、伊豆八丈測量のもの滞り無く出立いたし候。それに就いて尾形謙治・横川岸・郁次郎等品川迄相い送り候。秀蔵・孝蔵は看病留守居に相い残し候所、秀蔵近所まで相い送り申したき旨、押して罷り越し同様品川迄相い送り、外々は昼七つ頃に罷り帰り候えども、右秀蔵は其の夜九つ頃迄、何処に立ち寄り居り候哉、九つ頃に帰宅、直ちに引き込み臥し候。……是度々教訓も致し候えども、誤り入り候と申す一言も、又此れより相い改め候と云う一言も之無く候。尤も無人にて、我等病臥に候えば、看病致すべき筋は眼前

に候。……多分願酒を相い破り酔い候て、深夜に相い帰り候事と察し入り候。右悪者追ひ払い無人に候えども、日々安心致し候。御地へ下向等は之有るまじく候えども、万々一下向候とも、家内に入れ候儀は御無用に候。」

四月二十七日に伊豆測量隊が発した当日、自分の看病のため、江戸に残すことにした秀蔵が、見送りに行きたいといつて無理に出掛け、深夜に酒を飲んで帰ってきたことに腹を立て、今迄いくら教訓しても間違いましたとかこれから改めますといった言葉もない、禁酒の願を破ったものと推察したので、追い出した。そちらへ寄ることがあっても家に人れるなど、放逐したことを伝えている。

秀蔵は忠敬にとつては実の子であつて、第一回の蝦夷測量に十五歳で同行させ、以後文化五年四国地方の実測が終るまで傍において、測量の業を習得させたものである。しかし性質に短慮粗暴な所があつて、大酒を飲み、忠敬から見ると不肖の子だつたらしい。遂に放逐の憂き目にあつたわけである。忠敬の方も、既に長男景敬が死に、いま又次男を失うとは断腸の思いであつたはずである。

いずれにしても、この頃忠敬は、体調がすぐれず、病床にあつて、痰飲の症状に悩んでいる時であつたから、老人の一徹から、つい暴挙に走ってしまったのではないかと推察される。

手紙では病氣も目を追つて快方に向かつているとか、髪も剃り、風呂にも入つて、平生同前になつたといつてゐるけれど、果たしてそうか、疑問である。

翌文化十三年八月から十月にかけて江戸府内の測量があつたが、これも多くは下役や弟子たちに任せて、自身はほとんど参加しなかった。さらに秋頃から「持病の痰」の症状で病臥する日がさらに多くなつたらしい。



十二月一日付け 東河老父の名の手紙(書状13-8)の中で、自分の病状を告げて、次のように書いている。

「我等も逐日、持病の痰も余程宜く候えども、冬至後の雪より、寒気に少しこまり申し候。しかしながら今日も無利むりに、寒見舞いに浅草迄罷り越し、大いに草臥れ申し候。明日天気よく候はば、かり駕籠にて相い勤め申すべく候。御安心なさるべく候。……」浅草とは厩局があつたところで、これに出勤するにあたり、今までは歩いていったのに、ついには駕籠を利用しなければならなくなったというのである。

文化十三年十二月十七日の手紙 妙薫宛 東河父(書状14-2)

「御文拝しまいらせ候。当冬は例年より寒氣強く候えども、御一同お揃い無事のよし目出度く存じ候。さる十二日の雪、此の方には一寸ばかり溜りまいらせ候。よつて二、三日には消え、却つて寒さ少々覚え候。かれこれにて持病痰少々相い発し、四、五日立ち病み同前に煩い申し候。昨日は引き籠もり候えども、今日は起き申し候。御苦労なられまじく候。」

前にも述べたように、忠敬の持病の痰、すなわち慢性気管支炎は、冬寒氣の厳しいとき最も再発しやすいのが特徴で、毎日のように痰の分泌がつづいて、呼吸困難から臥床を余儀なくされる。忠敬の病状はまずそれに類するものであった。

それを示す書状として、渡辺一郎著「伊能測量隊まかり通る」によると、伊能の内弟子として第七回の九州第一次測量から同行した箱田良助が、文化十四年三月九日付けで、国元の福山に送った手紙に、忠敬の病臥の状を次のように伝えているという。

(前略) 当方、勘解由先生は、昨冬より御持病の痰を發し、今御病床にあります。長煩いで、御老体なので皆で心配しております。も

つとも暖氣に伴い、追々快方に向かつていらつしやるご様子で、一同安堵しております。

右のようなことなので、御用、家事とも万事小子にお任せになつており、誠に多忙で寸暇もない状態です。……」

#### 4

忠敬は持病の痰に対して、どういう治療を行なったか。

龐大な書状が残されているけれども、これこれの医師の診察を受けたとか、これこれの薬を服用しているといった記述がまったく見当たらないのである。ではどうしたのか。

忠敬が、主として用いた治療法は当時の民間薬として評判の高かつた玉子酒である。鶏卵を酒にいれ、砂糖を足してかき混ぜ、暖めて飲むのである。玉子湯ともいった。

玉子は佐原の方が安いだろうということで、娘のいね(妙薫)に、地元で買つて江戸に送るよう依頼している。

文化十三年十月十六日付け 東河大老人 妙薫宛(書状13-1)

「鶏卵の儀、おりゑへ度々申し聞けば、江戸表は百文に六つ、一つ十六文に候。則ち御地は一つ十文か、十一、二文と存じ候間、五百文にても式朱分にて御買入、飛脚へ遣わされ成らるべく候。冬至前にも候えば随分長持ち致すべく候。」

卵の値段は江戸では十六文もするが、佐原では十一、二文だろう、多い目に買つて、飛脚便で送ってくれと頼んでいる。

先にあげた同年十二月一日付け、東河老父の名の妙薫宛の手紙の中でも、鶏卵と同時に引き抜き蕎麦を送ってくれと依頼している。(書状13-8)

注文の品は次のようになっている。

「先日もし遣わし候

一、鶏卵 五、六十ばかりも

一、銚子牡蠣 三升ばかり

近々飛脚便に遣わされ給わるべく候。

一、引き抜きそば 三、四升

一、白餅米 六、七升

是れは正月舟積みにて宜く候。」

翌十四年にも咳痰の病状がつづくため、佐原から玉子を送ってもらっている。事前に値段を調べさせた手紙が残っている。

十月二日付け 妙薫あて 東河父（書状12-2）

「玉子の値段一つ老老文宛の由、承知致し候。間宮に七十程もらい候間、当時十分に養生致し候。」

玉子の値段十一文なら江戸より安い、その値段で買って送ってくれというのである。なおここに出てきた間宮というのは、有名な間宮林蔵のことである。間宮は一時、伊能忠敬の所に泊まり込んで測量術を学んだことがある。彼はこの技術を応用して、樺太探険でその地勢を測量し、さらに樺太が大陸とは離れて島であることを確認して、間宮海峡の名称で、自己の名を世界地図のうえに残した人物である。彼からも玉子をもたらしたと思われる。間宮は忠敬が蝦夷地測量でやり残した西北部海岸の測量をしており、忠敬の地図の完成に寄与している、忠敬とはきわめて強い信頼関係にあったものである。

鶏卵がどう効果を上げたか、次の手紙が物語る。

文化十四年十月二十六日 妙薫あて（書状2-2）

「……我等も先日より大いに宜しく寒熱も之れ無く、咳嗽も鶏卵の効験にや減じ申し候。此の様子にては一兩年は何事も之れ無くと存じ

候。……

一 先だつて引抜き蕎麦送り給い、三四度に賞味致し候。此の度又々引抜き四升贈り給り、大悦之れに過ぎず候。此の上の儀仰せ遣わされ候来月八日にては十三日頃にて宜く候。

一 玉子六十五たしかに落手申し候。間宮林蔵より三十五宛、兩度に七十貫い申し候あいだ、玉子十分に相成り申し候。江戸表は百銅に六つ位に候。御地は何程にて御整え成られ候哉。跡々は様子により暮にも春にも申し遣わすべく候。」

玉子を飲んで、咳嗽の症状が多少減ったようだというのである。なおこの手紙にはつづいて、さらに次のような興味のある記述がある。

「一 狐の儀、保養に候あいだ、狐の肉食養に進め候もの之有り候段仰せ遣わされ、忝く存じ候。先様へも宜しく御伝達給わるべく候。さりながら之れまで四足は食し申さず候。況んや狐の儀保養に相成り候とも、食し申すまじく候。此の頃は御当地も鴨・雁の類、高値に候あいだ、鶏の柏メン鳥一羽、三百銅宛にて相い整い食し申し候。鴨は一番（但し二羽）にては金壱歩四、五百銅くらいに候。御地は何程くらいに候哉。後音に値段仰せ遣わさるべく候。しかし鶏の方が鴨より菓にて下値に候あいだ、当分は鶏に致すべく候。

一 菌の菓沢山お送り給わり忝く存じ候。すぐに当時相い用い申し候。

……

同じ頃、狐の肉が咳痰の良薬だからお父さんに送ったかどうかと、妙薫に奨めるものがあつたらしい。狐はコンコンと啼くので、その黒焼きが咳痰にいいといわれていたものらしい。妙薫が狐の黒焼きを送りますかと問い合わせたのにたいして、忠敬はいままで四つ足の肉は食べたことがない、勧めてくれた人に断つてくれ、それより鴨の

肉はどうか、しかし鴨の肉よりもっと値段が安い鶏の肉で済まそうといっている。

隠居はしていても、さすがに一家の主人、無駄を省いて節儉の習慣が抜けていない。

5

文化十四年は忠敬の死の前年である。この年忠敬は七十三歳となった。一年の初めから毎日のように咳痰に悩まされる情況が続き、ほとんど寝たり起きたりの毎日であった。

特にこの年の夏は猛烈な暑さだった。忠敬はかなり健康に痛手をこむつたらしい。

六月二日の手紙 妙薫宛、東河父の名で（書状9-1）

「大暑に候えども、弥御揃い御無事に御暮らし成され候御儀と大慶致し候。此の方一同別状無く候まま、ご安堵なさるべく候。」

一、我等も当年は不気候ゆへか、度々痰飲にて打ち臥し申し候。漸く全快、今日髪月代を致し候。御安心給わるべく候。」

夏中、痰飲の症状で病臥していたが、今日やっと月代（さかやき）を剃ったというのである。

同じく七月二十七日付け 妙薫宛 東河老人名で（書状10-6）

「当年は大暑にて、七十三の老人大難儀致し候。漸く今日は少し涼しく候。明日は又秋暑と存じ候。兎角咳嗽止まりかね、こまり入り候。卵湯にて少しは快方と存じ候えども、全快は手間取り申すべく候。」

その頃、亀島町の忠敬自宅では、門弟達によって全国地図の作製が続けられていた。

彼は病床にありながら、調子の好いときは、助言を与えながら日を過ごしていた。

しかし彼自身自分の死期を悟っていた節がある。

文化十四年八月十一日 妙薫宛、東村の名で出した書状（書状20-3）の中で、自分の年はすでに七十三、これ以上長生き出来そうもないと、心境を洩らしている。

これは佐原の自宅の蔵地を他の人が借りたいと申し入れてきた時の返事の中であるが、忠敬は以前其所に隠居所を立て、書院にしようと思っていたらしい、しかし今年七十三歳にもなつて先が短い、長生きしたとしてもあと二、三年、むかし考えていたような書院を建てることなどとても覚束ないと、次のような弱気に吐いている。

「……漸く冷気に相成り、御同前暮らしよく候。愈御無事大慶に候。此の方別状無く罷り在り候。しかし古希を越え候ゆへか、我等は不天氣にも、暑にもこまり申し候。然し今日は余程宜く御座候。」

……其の隠居書院の物語はむかしの事に付き、今は中々左様には相成りかね候。年も七十三才、長命にても今三、四年と存じ候。

……我等も病氣宜く候えども、病後下ごんに付きなにかと略し候。」ここにいう「下ごん」とは、下根、すなわち卑しい性質という意味であつて、病氣になったため性質も「下ごん」になつて、なにかと手間を省くようになったと自嘲しているのである。同時に自分の死の近いことを自覚したものであろう。

6

忠敬が没したのは、翌文化十五年、改元されて文政元年、四月十三日のことである。

正月以来床に付ききりになつて、妙薫が佐原から出てきて看病にあたつたが、悪くなる一方で、ついに全国地図の完成を見ることもなく、江戸八丁掘亀島の屋敷で没したという。

其の模様を大谷亮吉「伊能忠敬」は次のように伝える。

「この後同年（文化十三年）十二月に至りても、忠敬はなお地図制作の事を監して、其の事務を執り、又筆を呵して地方における門弟等の質疑に応ずるの元氣を存して、文政元年の春を迎えしが、幾何もなくして健康著しく不良に傾き、衰弱の度を増進せしものの如く、遂に文政元年（一八一八）四月十三日（太陽暦の五月十七日にあたる）を以て、八丁堀亀島町の邸に没せり。年七十有四。

忠敬病篤きに臨み左右を顧みて曰く、『余のよく日本測量の大事業を成すを得たるは、全く先師高橋先生の賜なれば宜しく先生の墓側に葬り、以て謝恩の意を表すべし』と。即ち遺志に従ひ、浅草新寺町源空寺の兆域に於ける高橋至時の墓側に葬れり。佛諡して有功院成裕種徳居士と云う。然れども奥地全図未だ完成せざるを以て其の喪を公表することを避けたり。」

忠敬の臨終の模様については、立ち合った人の記録が無いから詳細はわからない。しかし遺書まで残しているところを見ると、最後まで意識は清明であつたらしい。

彼の持病である痰、すなわち慢性気管支炎（慢性閉塞性肺疾患COPD）の予後についてはほぼ一定しているので、おおよそ推測が可能である。

慢性気管支炎はきわめて長い経過をたどり、徐々に重症化して、最後は急性増悪のもとに急性肺炎の形で死去する。一般に老人性肺炎と呼ばれる。

忠敬の場合もおそらくこの経過をたどつたものである。第二次九州測量後満四年の闘病生活だった。

日本奥地全図は、忠敬の死後、高橋景保の指導の下で、天文方下役と忠敬の弟子達の力で進められ、三年後の文政四年（一八二二）遂に

完成した。

作成された図は全部で次のようになる。

大図	縮尺三万六千分の一	二百十四枚
中図	二十一万六千分の一	八枚
小図	四十三万二千分の一	三枚

これに大日本沿海実測録十四巻を副えて、幕府に納められた。

高橋景保と、忠敬の孫三次郎改め伊能忠誨とが、江戸城に上つて上呈した。

#### 引用文献

- ・大谷亮吉『伊能忠敬』帝国学士院、岩波書店 一九一七（大正6年）
- ・小島一仁『伊能忠敬』三省堂 一九七八（昭和53年）
- ・佐久間達夫『伊能忠敬測量日記』自家版 一九八八（昭和63年）
- ・中田浩一郎『慢性気管支炎』山村・吉利監修『最新内科学体系』第六十巻『肺気腫・閉塞性肺疾患』中山書店 一九九四（平成6年）
- ・千葉県史編纂審議会『伊能忠敬書状』千葉県 一九七三（昭和48年）
- ・渡辺一郎『伊能測量隊まかり通る』NTT出版 一九九七（平成9年）

#### あとがきにかえて

忠敬の死について「臨終の言葉はない、急死ではなかったか」という渡辺一郎氏のご意見、興味深く拝見しております。

私も大谷亮吉氏の「伊能忠敬」にある「先生の側に葬り（云々）」の言葉が臨終に際して述べられたものか、疑問をもっています。平素そのような希望を述べていたことは当然想像されますが、それが死に臨んで遺言として述べられたかということになると疑わしいと思います。

慢性気管支炎は何回も急性肺炎を繰り返しますし、そのつどあるいは死ぬかと思われるのに奇跡的に回復して元気になることが再々ありますので、このたびも又回復するかもしれないと周囲も本人も樂觀していたところ、悪化が急速に進み、呼吸困難から意識喪失に陥り、死に至るということがよくあるものです。

したがって忠敬の場合も（すでに昏睡状態に陥っているのですから）死を意識しての遺言というものはなかったのではないかと思います。それが当然考えられます。

忠敬の死は「急死」であつたというより、今度も治るのではないかと思つていたのに予想外に進んで死去したというのが真相ではないかと思ひます。したがって墓のことはもちろん、家のこと、地図のことなどについても臨終の言葉はなかったという推論は妥当と思ひられます。「元気なうちの茶飲み話」ではないかというご意見に賛成です。

なぜこのようテーマに関心を持ったかと言いますと、私は伊能忠敬に特に関心があつて研究したわけではありません。これまで有名な文化人（賀茂真淵・本居宣長・新井白石・中江藤樹など）の死因を研究して来ましたので、その一環として取り上げたというにすぎません。伊能忠敬と同じように慢性気管支炎から肺炎を併発して死亡したものに、賀茂真淵や近松門左衛門などがおります。

（すぎうら もりくに・山形大学名誉教授、医学博士、

大津市在住、新入会員）

# 編集部注

文中で、賀茂真淵、近松門左衛門のことに言及しておりますが、

詳しくは著書「文人の死因」をご参照下さい。「もし興味のある方が居られましたらご教示願えれば幸いです」とお便りがありません。



著書紹介 杉浦守邦著

「カルテ拝見 文人の死因」

東山書房(京都市)2002年5月

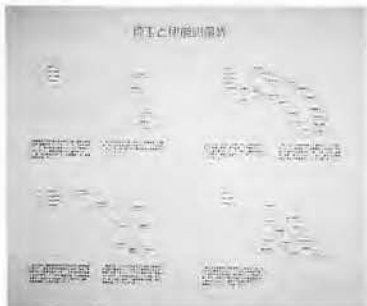
なお、杉浦先生には前著作に「カルテ拝見 武将の死因」があります。

## 地図展さいたまから



アメリカ大図の公開

武蔵、江戸、下総、相模、相模野



埼玉と伊能測量隊



伊能忠誨日記

(四)

佐久間 達夫

文政四辛巳年(一八二二) 伊能忠誨一六才

十月

一七日 予、平右衛門同道、津ノ宮先生宅へ行く。吸物、御盃、刺身等出る。それより加納屋へ行く。酒飯馳走。内より迎え船来たる故、それに乗り、四ツ半時前帰る。東土川祖母死去の由聞く。明朝、東土川へ行く支度。

一八日 予、朝六半時頃、榎場久兵衛、文蔵召連れ、上総東土川へ出馬。久兵衛(注一)も乗る。即ち馬二疋。多古浜田屋にて中食、九ツ時頃也。此より久兵衛乗り来たりし馬を帰す。予、久兵衛、文蔵等歩行にて、小堤迄行き、此所より、予、又馬に乗り五ツ時過、上総東土川小川治(新)兵衛宅へ着。飯すみ湯に入り休む。昼後大膳。今朝、伯母足をくじく。

一九日 予、久兵衛、文蔵等を連れ、祖母御墓に参る。帰り御隠居に行き、御位牌を拝み、富田御叔母様と話し、本家へ帰る。此より予、久兵衛、文蔵、馬子浜へ行き見物す。大風故、漁船不出。魚屋にて中食。七ツ時帰る。朝四ツ時後晴天。昼後時雨雲出つ。直ちに晴。此の時見る、一ツの虹を。後にて聞くは、此時、箱田、養純、彦次郎、ハツ、伊八、塚田隠居等、諏訪(神社)へ行き、辻水足元より一虹出しと云う。此虹、即ち此ならん。

二〇日 予、久兵衛、文蔵等、六時後東土川出立。予、馬に乗り、荒

井の後前より、予歩行にて今々に至る。時に八時後也。中食。久兵衛馬に乗り、鳥羽の木戸にて日暮れる。与倉の地蔵にて迎える者、柏木音右衛門、同六助に逢い同道す。法界寺下にて乳母に逢い同道帰る。此時、大根へも二人迎え出し候由。地主隠居、箱田、養純等、十八日御帰りの由也。十九日は諏訪へ御出の由。今日は茸場に御出、迎える者、道にて御目にかかりし由、茸場案内、六助の母、久兵衛内義。伯母の足、十三枚にかかりし由。

二二日 久保木俊蔵来たる。吸物、酒等出す。昼前、予、箱田、彦次郎、伊能七左衛門宅に呼ばれ行く。後より地主の隠居、お琴来たる。又、平右衛門、又、永沢治郎右衛門来たる。酒飯馳走。五ツ前帰る。

二三日 地主の隠居、桑原養純、箱田左太夫、伊能平右衛門、同娘二人(おワカ、おナツ)、伊能七左衛門、加納屋治兵衛、荒川茂兵衛の彦次郎、伊八等、鮭網を見に二ツの船にて鳥井川岸前迄行く。今日あいにく鮭一本も取れず。箱田左太夫、網を引中に鳥井川岸へ船を付け加納屋へ行く。すぐに船を戻し網を見る。間もなく加納屋より迎え来たり船を加納屋の川岸前迄可<sub>レ</sub>付け取、船はいり処二丁斗り前に船を付け、此所より地主の隠居、桑原養純、予、平右衛門娘二人、彦次郎等上り加納屋へ行く。又、酒飯馳走。船にて宅に帰る。夜四ツ時頃也。伊八、客と共に予等も帰る所、伯母足をくじきし故、予等は、二七日迄延びる。右帰りは、船中にて地主隠居三味線引き、賑やかに帰る。

二四日 箱田左太夫出馬。右は成田を廻り江戸へ着致す積もり。四ツ

時頃、地主の隠居、桑原養純、おコト、ハツ、伊八、柏木音右衛門等出船、江戸表へ帰る。右、柏木音右衛門は、即ち、おコトを龍ヶ崎へ送りの為也。

犀輔様、夜前着の由、予、九ツ時頃、本屋新左衛門（注2）宅へ行く。渡辺犀輔様に御目にかかり帰る。此時、永沢治郎右衛門に本屋にて逢い、同時に御目にかかり同道、大橋迄帰り別れる。

予、榎場久兵衛を連れ、牧野観福寺へ行き墓参り、帰りに齊藤へ寄り折節留守故、直ちに帰りに浄国寺へ行き、墓参り寺へ寄る。折節聖人様留守故、直ちに帰宅。今夜蕎麦を食う。永沢治郎右衛門来る前、斎藤来たる。左門は、夜九ツ時頃迄遊び居る。

二四日  
左門来たる。予、茂兵衛、彦次郎連れ、伊能平右衛門方へ呼ばれ行く。間もなく遠成寺（円城寺）治郎左衛門（注3）来たる。予囲碁。加納屋治兵衛後より来たる。酒飯馳走。四ツ時頃帰宅。遠成寺へ予六ツ置く。予、勝負勝ち。同人は、予等より先へ帰る。渡辺犀輔入来。

二五日  
石屋三郎兵衛来たる。予、永沢半右衛門方へ呼ばれ行く。相伴、永沢治郎右衛門、伊能七左衛門も呼ばれ来たり、酒飯馳走になり帰宅。

二六日  
昼後、遠成寺治郎左衛門を呼び、予囲碁。四番勝ち、二番負け。蕎麦を出し予も食べる。暮頃、永沢治郎右衛門方へ呼ばれ行く。伊能七左衛門も呼ばれ来たり。治郎右衛門相伴、四ツ時後帰宅。帰宅前、中時、酒飯馳走済みにて後、右三人、親支の契約。同前の話。

予、江戸表引払い、於「在所」、御用相勤め候節は、御手伝

い致度候間、他人相入候事不承知の由、兩人云う。予、承知致し候旨。

二七日  
佐原村本家出立（注4）。二双。川口迄は横川岸の帯刀妻、及び娘等、田宿の女房共也。鍵屋、油屋等、永沢治郎右衛門、伊能七左衛門、平山左門、荒川の茂兵衛は飯嶋迄送り、伊能平右衛門は木下迄、碁と共に送る。栄吉、藤助、文蔵、彦次郎、栄吉、藤吉など。一ツ船は、予、伯母、平右衛門、忠吉妻、おサン、松屋政五郎は、供船に乗り木下迄来たる。夜九ツ半時頃、木下迄着船。

二八日  
早朝、船中にて支度。予、彦次郎、おサン、歩行にて大森に至る。五ツ時頃也。此所より予、彦次郎、おサン、馬に乗り白井に至る。四ツ時頃也。直ちに又、予、彦次郎、おサン、馬に乗り九ツ時頃釜ヶ谷江戸屋へ着。中食。今朝、木下出立の時、伯母は迎え駕来たり居り候故、文蔵連れ直に通駕にて行き、釜ヶ谷江戸屋にて待ち居候故同時出立。予、彦次郎、おサン、馬に乗り八幡富田屋に着。八時頃、伯母、又、此所で待ち居り同時出立。予、馬に乗り、直に伯母一川通り故、おサン相連れ、予等と別れる。予、久兵衛、藤助、栄吉、彦次郎、七ツ時前行徳しがらき屋へ着。天満屋長兵衛来たり船迄送り帰る。

予等船に乗り、舟堀に至り、文蔵、伊八迎え出て候故、此所にて同船す。扇橋過後、紙屋甚七迎えに出き候に不レ逢同船、紙屋川岸まで船を付け皆々上る。紙屋の前にて、予、箱田に逢う。時に紙屋新兵衛、新五郎は行徳川岸まで迎えに出て候由。直ちに亀嶋の宅へ着。桑原養純来たり居り候。紙屋内義、妹、兩人来り居る。持田勝三郎来たる。紙屋新兵衛、

同新五郎来たる。予入湯。伯母も入湯す。足、伯母不<sub>レ</sub>入。箱田、保木も今夜は泊まる。此前、予等二三日出立致し候つもり故、其時は大坂町樽屋の内義も来たり手伝い候由。持田勝三郎も来たり候由。養純来たり入湯す。

二九日

予、土産物等を持参して彦次郎、半兵衛を連れ、高橋侯へ行き、下河辺、永井へ寄り、足立へ行き、それより神田御屋敷渡辺犀輔宅へ行き帰る。又、彦次郎を連れ、佐藤及び桑原へ行き帰る。今朝、予、高橋侯へ行きし時、彦次郎、半兵衛而已に非ず、栄吉、文蔵、藤助相連れ候得共、高橋侯へ土産を置き、直ちに三人の者、浅草観音に参り、此より所々へ行きし由。土産物は高橋侯、下河辺、永井、足立、佐藤へ遣わす。柏木久兵衛も本店、及び所々へ行きし由。大野弥三郎来たる。根付時等の支合は、時計持参して、予、伯母に見せ帰る。文蔵、藤助、佐原へ帰る。

三〇日

十一月

一日

予、御役所へ行く。紙屋新兵衛来たる。桑原隆朝来たりし由。

二日

予、御役所へ行く。八ツ頃仕舞。今泉又兵衛より十文の足袋六足請取帰る。柏木久兵衛今朝帰国。大野弥三郎、二階へ上ガ置候。打時計磨き出来持参。栄吉、今夜暇乞いして行徳川岸へ行き、明朝出船致候つもり。紙屋庄蔵来たり囲碁。おサン、地主隠居と共に堺町フキヤ丁飾り物見物。

三日

予、佐藤林講へ行く。

四日

半兵衛、おサンを連れ、芝、丸の内辺を廻り見せる。此時、半兵衛に芝三田二丁目アハ殿横丁、水野様中屋敷田口惣右衛門方へ廻り書状、並びに仙台領の図、豊前国図、対馬国図差

出し、全図十枚、惣右衛門へ遣わす。

半兵衛、おサン、五ツ時前帰る。此時半兵衛、田口より書状、並びに頼み置きし御朱印の写し等を持参。但し二冊未成由。予、御役所へ行く。今泉又兵衛へ足袋六足の代金仁朱を遣わす。

五日

予、佐藤句釈へ行く。大野弥三郎来たる。重箱持参。一重取るつもり。大野弥三郎へ今泉よりの足袋五足を請取り帰る。此足袋、予のには小さき故、弥三郎に見せる。

六日

予、御役所へ行く。石坂六兵衛病氣快氣、御役所へ来たる。重太郎より話す。

七日

予、灸をすえる。石渡より草双紙(注6)を借りる。おサン、紙屋の内義の供にて御城へ行く。

八日

予、御役所へ行く。文政辛巳年冬、日躔(注7)拝借し帰る。太陽赤経緯を写す。

九日

石渡へ草双紙を返す。今夜柏木久兵衛来たる。予の印鑑等持参。右は、予御扶持方、今年分請取の故。又、石渡より草双紙を借りる。

一〇日

予、御役所へ行く。伯母、高橋侯へ行く。予、文政辛巳年冬、日躔持参返上。又、文政壬午年春、日躔拝借し帰る。

十一日

足立長雋来たる。伯母、紙屋内義、庄蔵、箱田左太夫等出血。紙屋庄蔵女房来たる。今夜、桑原養純来たり遊び帰る。

十二日

予、久兵衛、源空寺へ行き、浅草観音へ参り、予は御役所へ行く。

十三日

今朝、久兵衛帰国。

十四日

予、御役所へ行く。囲碁にて遅くなり、夕飯を食べ帰る。永井(注8)より星図を借りる。文政壬午年春、日躔を返上す。

一六日 荒川の伝四郎来たる。伊八来たる。

一七日 予、御役所へ行く。手あぶり、おび、蒲団かどん等持参し、先生へ上る。高橋侯より代わりに一俵を又蔵に持たせ帰す。

一八日 予、佐藤へ行く。

一九日 予、御役所へ行く。

二〇日 荒川の伝四郎来たる。今晩早起き、測る二少衛（注9）東増八。即ち最卑。紙屋新兵衛来たる。桑原隆朝来たる。

二一日 今朝早起き、測る二少衛東増八を。最卑。今朝永井甚左衛門、予の御扶持方請取り持つて、郡代屋敷山田茂左衛門様御役所へ行き、御手形を請取り、並びに後年用えるところの請取ある文を持ち帰る。但し、後年閏月、大小に代わるところ有り、来年の請取案文左の通り。

請取申御扶持方之事

米合九石六斗者、但参升也。

右覚者、御扶持方五人扶持

当午正月朔日より十二月晦

日迄、日数三百八十四日分

為御扶持方書面之通請取申

候哉。実正也。仍如件。

文政五年十一月

伊能三郎右衛門 印

山田茂左衛門様

御役所

予の名代として永井甚左衛門、於山田茂左衛門御役所手代元

縮沢田寿佑より御手形呉、案文等持ち帰る。伯母、紙屋一統等、三十間堀の神明の地内の安灸へ行き、八半時頃帰る。此灸は、一ヶ所へひと火づつにて、伯母は十四ヶ所の立て帰る。

御手形控（是即ち永井持ち帰りの御手形）

覚

一、式石九斗壹升ト五合

伊能三郎右衛門渡

右者、其村去辰御持米置居

米之内、書面之石数相渡皆

濟目錄引替之節、勘定可被二

相立一候。以上。

已十一月二十一日

当茂左衛門手代

沢善之進 印

同人手附

竹川勢右衛門 印

同人手附

沢田寿作 印

辻子太夫 印

下総国香取郡

佐原村領田

名主

組頭中

二二日 予、御役所へ行く。夕七ツ時前御役所金星南中の測り有り。

以三其数 求十一月二三日、予の宅の球数（注10）測得、金星南中球数一十五万二千〇五十三。

二三日 予、御役所へ行く。

二四日 予、御役所へ行く。

二五日 予、お役所へ行く。高橋侯入来。

二六日 田口惣右衛門来たる。御朱印写持参す。暮れ頃帰る。保木も暮頃帰る。

二七日 内田弥次馬来たる。内田弥次馬、柳屋の孫を連れ来たり、予に弟子入りする。予、御役所へ行く。高橋侯の奥より御基所迄行かず、明日文案改也。川口勝次郎の家出来引つ越しの由。

二八日 予、佐藤へ行く。箱田左太夫、今日泊まるつもりにて居られし所、桑原養純来たる。四ツ時過養純帰宅の節、左太夫同道帰る。左太夫、桑原へ泊まる。

## 十二月

朔日 予、御役所へ行く。

二日 予、御役所へ行く。今夜、田口惣右衛門方より草紙をよこす。惣て約束故。佐原へ下せし右手形請取、飛脚持ち帰る。

四日 予、伯母と三十三間堀の安灸へ行く。箱田泊まる。勿論星測りのためとて、実は箱田内に居るは、困ること有りて□□。

五日 予、御役所へ行く。箱田泊まる。

六日 予、佐藤へ行く。箱田幡町へ帰る。今昼頃、リキ、おサン母来たる。

七日 予、御役所へ行く。箱田泊まる。今夜東次郎来たる。予、望星鏡台をあつらえる。今朝おサン、同人母帰国。半兵衛、釜ヶ谷迄送り行く。

八日 予、佐藤へ行く。桑原隆朝来たる。七ツ時頃半兵衛帰る。今八ツ時前初雪降ると云う。

九日 今朝東次郎、予の誂えにて望星鏡台を持来たる。予、御役所へ行く。今日、木星、土星の赤道経緯を東儀に頼まれ推算す。足立重太郎より大坂への書状、日本橋左内の脇、和島屋甚兵衛方へ持参し渡す。

一日 今晩、又蔵、伯母の指、□□火止。三角屋敷菅谷文作方へ行く。今夜五ツ前帰る。予、御役所へ行く。箱田、今夜語り居候所、四ツ時頃、番町より又来り大語りの由故、箱田、番町へ行く。今夜は東次郎勤めに泊まる。

二日 予、御役所へ行く。七ツ時頃、直ちに源空寺へ行く。但し彦次郎、衣装を持ち御役所より来たる。直ちに右連れ行く。彦次郎泊まる。

二三日 予、佐藤へ行く。足立長嵩来たり。伯母瀉血。箱田左太夫来たる。父死去の由。但し表向大病の積もりの由。即ち番町実家より来たるに帰る。今朝浅草鳥越出火の由。下河辺来りて聞く。彦次郎泊まる。

四日 予、高橋侯へ行く。昨朝、火事は知らずに不<sub>レ</sub>来の由申上げ直ちに帰る。彦次郎泊まる。

五日 今夜、京橋口六丁出火。下河辺来たる。火事消方帰る。予、御役所へ行く。桑原隆朝来たる。彦次郎泊まる。四ツ時後見舞。

六日 予、佐藤へ行く。佐藤は今日終会也。桑原養純来たる。

七日 予、御役所へ行く。

八日 高橋侯入来。今夜四ツ時前より九ツ時半迄□□町より出火焼失。岡田、保木、但し弥市を連れ来たる。道助、平次、



川口、吉川等来たる。箱田来たる。人に遅れて下河辺、永井来たる。下火なり。皆々来たる。

一九日 予、高橋侯へ行き、山路(注11)、吉田侯(注12)へ寒中見舞に参候由申上る。直ちに吉田、山路侯へ至る。札を置き、足立様へ行き罷出。右して又、渋川侯へ行く。帰りに三宅へ立寄り帰宅。

二〇日 予、御役所へ行く。先生、予の始まりより今に至る仕事を見度由故、予、仕事を持参し、御目にかける。

二一日 永井、下河辺に蕎麦を上る。但し下河辺残居り。永井も残り居て七時半後より始り、六ツ時頃永井は帰る。儀象考成(注13)二十三枚、永井に頼み校合する。但し、今二十三枚出来候故。持田勝三郎、今日迄来たる。石渡鐘太郎来たる。

二二日 予、御役所へ行く。八ツ時仕事にて帰る。但し伴伝次郎より下河辺へ急書持参。

二三日 今夜、柏木音右衛門来たる。

二四日 予、御役所へ行く。重太郎書初めの御手本を請取る。

二六日 今日煤掃き。半次郎頼む。予、二階にて永井と校合。即ち儀象考成、文政八年書也。坂部藤五郎来たる。高橋作左衛門手附測量御用下役被<sub>レ</sub>仰付<sub>一</sub>候答。

二七日 九ツ時前、神田御屋敷より書状至来。ただちに予上下にて御屋敷へ行く。渡辺、中安、予に申渡す。左の通り。当分、高橋作左衛門様御手附手伝可<sub>二</sub>申付<sub>一</sub>答植村駿河守様より御達<sub>ニ</sub>付、此段申渡間入念可<sub>二</sub>相勤<sub>一</sub>者也。

中安、予同道高橋侯へ行く。中安口上を述べて帰る。予、吉田、山路、高橋侯等の御手伝い、下役衆へ初廻りて帰宅。吉川、隠居と来たる。箱田来たる。泊まり居る。三宅来たり、

クイズミ等積む。

二八日 予、先に桑原へ行き、御仰付候旨を申す。植村駿河守様、及び堀田摂津守様、右者手札を御玄関に持ち上り置き帰る。神田御屋敷、市野金助、渋川侯、東儀隼人へ語り、廻りに行く。それより源空寺、及び足立、高橋侯へ行く。帰り吉川へ寄る。留守故直ちに帰る。

三〇日 箱田、深川、岡田等へ行く由。保本来たる。下河辺来たる。即ち、先生の使者聞き置候故。予へ慰斗目(注14)着用可<sub>レ</sub>致也。尤、屋敷へも着し参上すべき旨、若し咎め有れば、此方にて挨拶すべき也と云う。紙屋新兵衛来たる。(つづく)

# 注釈

## 注1 柏木久兵衛

四代柏木久兵衛は、明和二年出生。伊能忠敬、景敬父子が死去後、特に忠敬の孫・忠誨の裏方として、伊能家の家業や他家とのつきあい、江戸の幕府拝領宅の管理などに献身的に尽くす。又、柏木家の「先祖書」を書き残した。天保五年一月四月に七十歳で死去。戒名は「本性院琢道心円信土」という。

## 注2 本屋新左衛門

佐原村下新町の人。

## 注3 遠成寺(円城寺)治郎佐衛門

佐原村の人。伊能三郎右衛門景常の第二子景光(幼名源太郎、後、市郎左衛門と称す)の妻が遠成寺家より嫁したと記述してある。

## 注4 佐原村から江戸への道

江戸時代に佐原から江戸へ登る道として、主に木下廻りと成田廻

りの二つの経路があった。木下廻りは利根川を船で木下迄行き、ここから木下街道を徒歩や馬で、白井、釜ヶ谷（鎌谷）、八幡、行徳と進み、行徳から船で小名木川を進み、大川（現隅田川）に至る経路と、佐原から陸路成田を経て、臼井、大和田、船橋、行徳に至り、ここからは木下廻りと同じ順路を経て江戸へ行く道であった。

注5 今泉又兵衛

諱を直利、通称を又兵衛といった。高橋景保の手附下役。九州二回目測量と江戸府内測量に参加、測量図の作製に従う。

注6 草双紙（くさそうし）

江戸時代の通俗小説。女、子どものための読み物で、多くはひらがなだけで書き、挿絵があった。赤本・黒本・青本・黄表紙・合巻を総称するときと、合巻だけをいうときがある。（この段旧表現による）

注7 日躰（にってん）

暦法で太陽の運行のことをいう。月の運行は月離といった。

注8 永井要助

諱を充房、通称を要助といい、後、甚左衛門と改名する。高橋景保の手附下役として、第七次以降の測量に参加。第八次の坂部貞兵衛死後は支隊長として、又、第九次伊豆七島測量では隊長として職責を果たす。シーボルト事件に連座して、江戸払いとなる。

注9 少衛

北の空の星で「ケフェウス」という。

注10 垂揺球儀

天文用の振り時計のこと。垂球の一往復ごとにひと刻みずつ進み、百万往復ぶん測れ、目もりは零に復帰する。一日に約五万九千往

復する。佐原市の伊能忠敬記念館には、伊能忠敬と忠諱が使用した垂揺球儀が、それぞれ一基ある。

注11 山路流

徳川吉宗の改暦企画の時、関流数学者山路主住が助手に採用され、以後、久次郎之徹（七七八年没）、才助徳風（一一一〇年没）、弥左衛門諧孝（一八六一年没）、金之丞彰常と天文方になる。

注12 吉田家

明和二年に始まった「宝暦暦」の修正事業の主務者であった吉田明和二年に始まった「宝暦暦」の修正事業の主務者であった吉田秀長が始祖で、靱負秀升（一八〇二年没）、勇太郎秀賢（一八三七年没）、四郎三郎秀茂（一八七〇年没）と天文方になる。

『暦』広瀬秀雄著、近藤出版社）参照

注13 儀象考成

儀象考成は一七四四年に戴進賢によって編纂された図書である。

注14 熨斗目

絹織物で武家の礼服として、麻袴の下に着た。

○佐原村の地名など

・諏訪神社 佐原村新宿の氏神

・鳥羽 現佐原市鳥羽

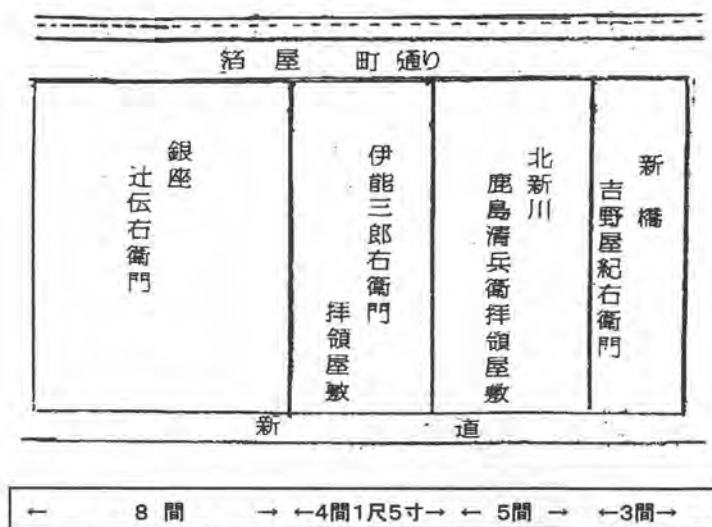
・与倉 現佐原市与倉

・大根 現佐原市大根

・荒川 現佐原市荒川（利根川の北岸）

・鳥居（居）川岸 現佐原市津ノ宮にあり、船で香取神宮に参詣する人は、ここで下船した。

・大橋 佐原村の中央を流れている小野川にかかっていた



◎ 伊能忠誨が幕府より拝領した町屋敷（江戸日本橋箔屋町）  
 文政四年九月十七日拝領屋敷

橋。現忠敬橋  
 牧野 現佐原市牧野  
 田宿 現佐原市田宿  
 横川岸 現佐原市横川岸

術、科学などに対する鏡ともいべきものである」



フィリップ・F・F・シールボルト

「暦や年鑑は、その暦を  
 広く使っている民族の主要  
 な宗教的習俗や、社会生活  
 の風習や、民衆の文化レベ  
 ルや迷信や、また産業、芸

「なにわの天文学展」長崎・シールボルト記念館

祖父勘解由儀、多年測量御用相勤度々遠国江罷越  
 此度実測之地図出来候。遠境辺土迄茂廻歴致し格  
 別骨折候に付、相応之御賞茂可有<sub>レ</sub>之処、病死候。  
 依<sub>レ</sub>之、三郎右衛門江御扶持方五人扶持並於箔屋町  
 八拾五坪之町屋敷被<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>之、永々帯刀可<sub>レ</sub>仕候。且又、  
 三郎右衛門儀茂測量術心掛候由、此後弥無<sub>二</sub>油断<sub>一</sub>相  
 励、於在所御用を茂可<sub>二</sub>相勤<sub>一</sub>候。

堀田摂津守殿よりの仰渡書  
 津田弾正知行  
 下総国香取郡佐原村  
 伊能三郎右衛門。

伊能忠敬 新たな実像

測量図の出版意図示す書簡 揺らぐ「幕府の秘図」説

日本経済新聞 11月15日「文化欄」より



中央写真は左から伊藤さん伊能さん安藤さん

江戸時代後期、日本全国を測量して地図を製作した伊能忠敬（一七四五―一八一八年）の未公開書簡がこのほど明らかになった。その中には幕府の「秘図」といわれていた地図を出版する意図があったことをうかがわせる文章など、従来の伊能忠敬像に修正を迫る重要な史料が含まれている。

### 下書き50点解説

今回判明した史料は、幕府の命令書などとともに東京の伊能家が保

管してきた六百点で、その中には忠敬自筆の書簡の下書き約五十点が残っていた。一族の伊能陽子さんが専門家の協力を得て中身を読み解きながら、整理した。

忠敬は大変筆まめで、測量日誌をはじめとし膨大な記録を残した。家族にも旅行先からこまめに手紙を書き送ったが、それらを含め、おすそ分けの札状まで、下書きをして出していた。

注目されるのは文化十四年（一八一七年）一月の小島九右衛門にあてた手紙の下書きだ。小島九右衛門は京都の数学者で暦を刊行した土御門家の関係者。下書きには、手がけている測量を間もなく終え、来年には地図を仕上げるつもりである旨を記し、「蔵板を相願い申すべき哉存じ奉り候」と書かれていた。

蔵板とは版木のことを意味し、出版のうかがいを幕府にお願いしたいがどうか、と相手に尋ねようとした文面に読める。

### 大名家にも写し

全国を実測し、製作した初めての地図である伊能図は幕府に提出された正本、伊能家に残った副本のほか、大名家などに若干の写しが贈られただけ。費用の多くを幕府が負担したため、重要な機密事項に属すると考えられてきた。それだけに、この書簡の通り出版の意図があったとすれば、「伊能図は幕府の秘図」という通説は大きく揺らぐことになる。

伊能忠敬研究会の渡辺一郎代表理事は「全く知られていない事実でびっくりしている。忠敬は町人だったにもかかわらず幕府の中枢部にいた人間と意を通じていて、自ら出版しても問題はないと判断していたのかもしれない」と指摘する。

これまで伊能図が「幕府の秘図」と歴史的に解釈されていたのには

理由があった。忠敬死後十年になる一八二八年、シーボルトが伊能図の写しをオランダに持ち帰ろうとして発覚、忠敬の師だった幕府天方、高橋至時の子息、景保が獄死する事件が起きていた。これを後世の歴史家が重視し、幕府が伊能図の持ち出しを厳禁にしていた、という見方が強まった。

ただ水戸の地理学者、長久保赤水は、比肩できる精度ではないものの忠敬の地図の三十年以上前に「日本輿地路程全図」という地図を出版している。また伊能図の写しは仙台藩、佐倉藩、福山藩など忠敬の測量に協力した二十以上の大名家に残っている（一部は記録のみ）。忠敬が自ら出版を意図していたのも、実際はそれほどの重要機密とみなされていなかったため、忠敬の死後に、当人が思いもよらないような扱いを受けた、とみることができる。

結局生前出版はされなかったが、最大の障害はむしろ、忠敬がこの手紙をしたためた翌年に急逝したことだったとも考えられる。

### 気配りの人

書簡からはこのほか、忠敬の人となりが鮮明に浮かび上がってきた。忠敬は商人らしくよく気が回ったと言われる。例えば測量調査から帰ってくると、測量に協力してもらった藩の江戸屋敷に必ずあいさつに出向いた。一日に二十軒も回ったこともあったという。

気配りの周到さは、商売上手に通じる。たとえば、佐原の本家に出した手紙では、前年の冬に買い込んだ二百俵の米の相場が高くなってきたから、食べる分の米だけを残してすべて売り払えと指示している。そんな忠敬も、孫の三治郎にはほとほと手を焼いていたことがわかる。文化十四年三月の娘、イネに充てた手紙の中で、「三治郎はとても私の手には余る子です。（中略）いくら教訓となることを教えてもその

日限りで、すぐに元に戻ってしまう。まったく三治郎はむずかしい子で、哲之助（弟）とは大違いです」と、ぼやきを交えながらつつづいている。

この時すでに長男の景敬は亡くなっており、三治郎が跡取りに決まっていた。忠敬の胸中はいかばかりであったろう。

「手紙の中にその人の人間性をくみ取ろうとすれば、下書きが最も適当かと思われる。先祖には申し訳なく思いつつ、お目にかけることにした」と陽子さんは説明する。忠敬研究に新たなページが加わりそうだ。

（日経編集委員松岡資明氏）

### フランスのペイレゴ夫妻が来日



「地図の修復が実現してうれしい」と話すペイレ夫妻

＝京都にて 朝日新聞京都版 11月19日



## 九州支部便り

### 『長崎市立博物館に「伊能図」を見に行く』の記

野田 茂生

九州支部の年に一度の恒例の研究旅行。六回目の今年は、石川支部長の発案で鎖国時代「西洋文明の窓口」だった長崎にした。お目当ては、長崎市立博物館が所蔵している三点の「伊能図」の写図である。

一行は石川支部長を初め、中富、本田、松尾（紀）、野田の五名。10月28日午前10時、特急「かもめ」で長崎駅に到着。博物館には一つ手前の浦上駅の方が近いのだが、「すり鉢」型の地形で路面電車が発達している長崎市内は「一日乗車券・五〇〇円」のチンチン電車が便利だと云うわけで、その乗車券が買える長崎駅で降りた。

約束の時刻には博物館に到着し、楽しみの「伊能図」と対面できた。

この「伊能図」は大村藩の測量方・峰源助が写したという「伊能図」のうちの三枚で、東海・北陸以東の東日本を描いた「沿海地図（小図）」と「四国図（中図）」それに「伊豆半島図」である。

渡辺一郎代表の著作『伊能測量隊まかり通る』によると、源助は、嘉永三年（一八五〇）に天文方・渋川助左衛門（五次測量隊の副隊長格を務めた高橋善助の後身）に入門し、六年間の修業中に九段にあった澁川家の観測所・司天台で虫干しの際に「伊能図」を見かけた。シーボルト事件後のことであるから、迷いながら写図を願ひ出ると、助左衛門はニツコリして「外へ出すなよ」といつて許可した。その澁川家所持の図からの写であるという。

三枚の図とも、やや色は白っぽい、地名などの文字は美しく、彩色も綺麗で、虫食いも少なく保存状態はいいようだ。ただ、この博物館の担当学芸員が不在で、峰源助がなぜ大村藩とはあまり関係がないこれらの地方の地図を模写したのか？あるいはもつと沢山写図した中の一部的なのか？さらに、どんな経緯で長崎市立博物館に所蔵されるようになったのか？など、私の疑問は解けず、些か残念だった。

それでも、今回の一番の目的は果たし、次は昼食。食事処の選定は、以前：といつても三〇年以上も前の話だが：現役時代五年ほど長崎に勤務し、土地勘があるということで、小生の役回りとなり、再び路面電車で中華街の「新地」へ向かった。先ず、ビールで乾杯の後、思い思いに長崎名物の「ちゃんぽん」や「皿うどん」を食した。

午後は、復元修復中の「出島」とシーボルトの「鳴滝塾の跡」を訪ねた。鳴滝塾もあいにく修復工事中だったので、隣にある「シーボルト記念館」を見学した。ここには、『シーボルト事件』を含め、シーボルトの二度にわたる日本での暮らしと活躍の様子が詳しく解説、展示されていた。さらに、たまたま開かれていた間重富や麻田剛立の業績を紹介した特別展「なにわの天文学展」を見学できた。思わぬ「不都合」が重なった旅だったが最後は運がよかった。終わりよければ、全て良し。

（のだ しげお・福岡県大野城市）



峰源助が写図した忠敬の「沿海地図」(小図)

# 伊能忠敬記念館収蔵品展示から

重要文化財に指定されている伊能忠敬に関する資料は、昭和36年4月に伊能家から佐原市へ寄贈されましたが、それ以外にも地図作りの材料となった各地の地図類や下書きなどが、伊能家には多数伝えられています。それらの資料が平成15年4月に佐原市に寄贈されましたので、昨年の収蔵品展で公開いたしました。その時の資料概要です。

## 一、佐原村関係古文書

- ・ 本宿鎮守の牛頭天王社祭礼に関する願書 享和二年五月
- ・ 高瀬舟の廃船手続きに関する証文 正徳四年二月

長崎市立博物館にて



峰源助写・四国図・部分



・ 船を商売に使うための登録願書

安永三年五月

・ 無登録船に関する問い合わせへの返答書

宝暦十一年十月

・ 六斎市に関する新宿側の申し上げ証文

寛永二十一年七月

・ 新島と根郷村に関する記録集

正徳四年

## 二、測量下図

・ 根布川村、伊豆大権現、熱海

・ 甲州巨摩郡布施村、黒沢村

・ 岩城郡四倉村、上新田村

・ 常州多河郡、菊田郡九面村

## 三、龜絵図

・ 土佐国幡多郡清水浦

・ 岐杵郡大村領ヨリ御料小瀬戸村

・ 備後国三次郡三次十日市町

## 四、測量参考絵図

・ 丹後国竹野郡

・ 近江国滋賀郡

・ 山城国宇治郡

・ 肥後国天草郡

## 五、下書き寄せ図

・ 江戸・両国橋付近

文化一四年

・ 江戸・亀嶋町伊能忠敬住居付近

文化一四年

・ 伊豆諸島・大島

文化一三年

・ 伊豆諸島・三宅島、御蔵島

文化一三年

・ 伊豆諸島・利島、新島、式根島、地内島

文化一三年

・ 伊豆諸島・神津島

文化一三年

## 六、その他

・ 伝、島津公からの拝領刀拵（大小）

江戸時代

・ 忠敬が使用した脇差（竹光）

江戸時代

・ 算木・版木

江戸時代

・ 祭礼幟 享保一六年・裱・三方

徳利・提灯

（伊能忠敬記念館）

## 忠敬談話室だより

### ○「松江近体詩」翻刻出版

□舞鶴市的小林清さん

地元紙の京都新聞に「伊能図修復」の記事がありました。記事を読んだ多くの方から電話がかゝってきます。大変ありがたいことです。最近、小西伯熙著「松江近体詩」太平文庫51の翻刻が出版されました。その中に贅記がありましたのでお送りします。

松江近体詩・贅記

『久美と浜／江戸期の久美浜紀行／久美浜と伊能忠敬／文化三年

久美浜図／江村北海の名文訓読／謝辞 太平主人編』から

『伊能忠敬の記述は松田昭二氏の「丹後に於ける伊能忠敬の足跡」と黒葛原祐氏の「伊能忠敬と久美浜測量」によるところが大きい。松田氏は最近発見された幕府測量隊を迎える久美浜方の村をあげての対応振りを事細かに記した久美浜村庄屋今西儀兵衛文書も紹介され、実に興味深いものがある。』

□久美浜の松田昭二さん

伊能測量隊の泊った小西家は北前船の廻船業を営んでいた富豪であり文人でもあったので測量日記にも特にそのことが記されています。

神谷神社保管文書には「測量方御出ニ付扣」「寄せ絵図」も残されています。

古文書は幕府直轄の久美浜代官の地元庄屋(郡中代で管内掌握)のもので、宮津藩の関係では龍献寺文書があります。



### ○江戸開府四百年行事から

東京都立中央図書館で東京都文化財ウィーク行事として「江戸・東京」資料展が開かれ、館所蔵の大日本沿海輿地全図(小図)の本州東部版245×164 432千分の1が公開された。

「江戸学を楽しむ」では『江戸東京さんぽまっぶ500分の1江戸・明治・現在図・航空写真1／6』清水靖夫解説(平凡社1995)が紹介。「雑誌編」では『歴史研究』505号江戸・東京のすべて「島原藩江戸屋敷物語」松尾卓次さんと『地図ニュース』365号 江戸開府400年「江戸図あれこれ」清水靖夫さん。「伊能忠敬を辿る・調べる」は「伊能忠敬測量隊・渡辺一郎編著」「伊能忠敬・小島一仁著」「伊能忠敬関係文献・資料目録(忠敬生誕250年記念)高木崇世芝編」、「伊能忠敬関係文献目録・未定稿 高木崇世芝編」がブックリストにあげられていた。

### ○「伊能忠敬と日本図」展関連行事スナップ(会員のお顔にたくさん出会う)

□秋期講座 11月1、2日

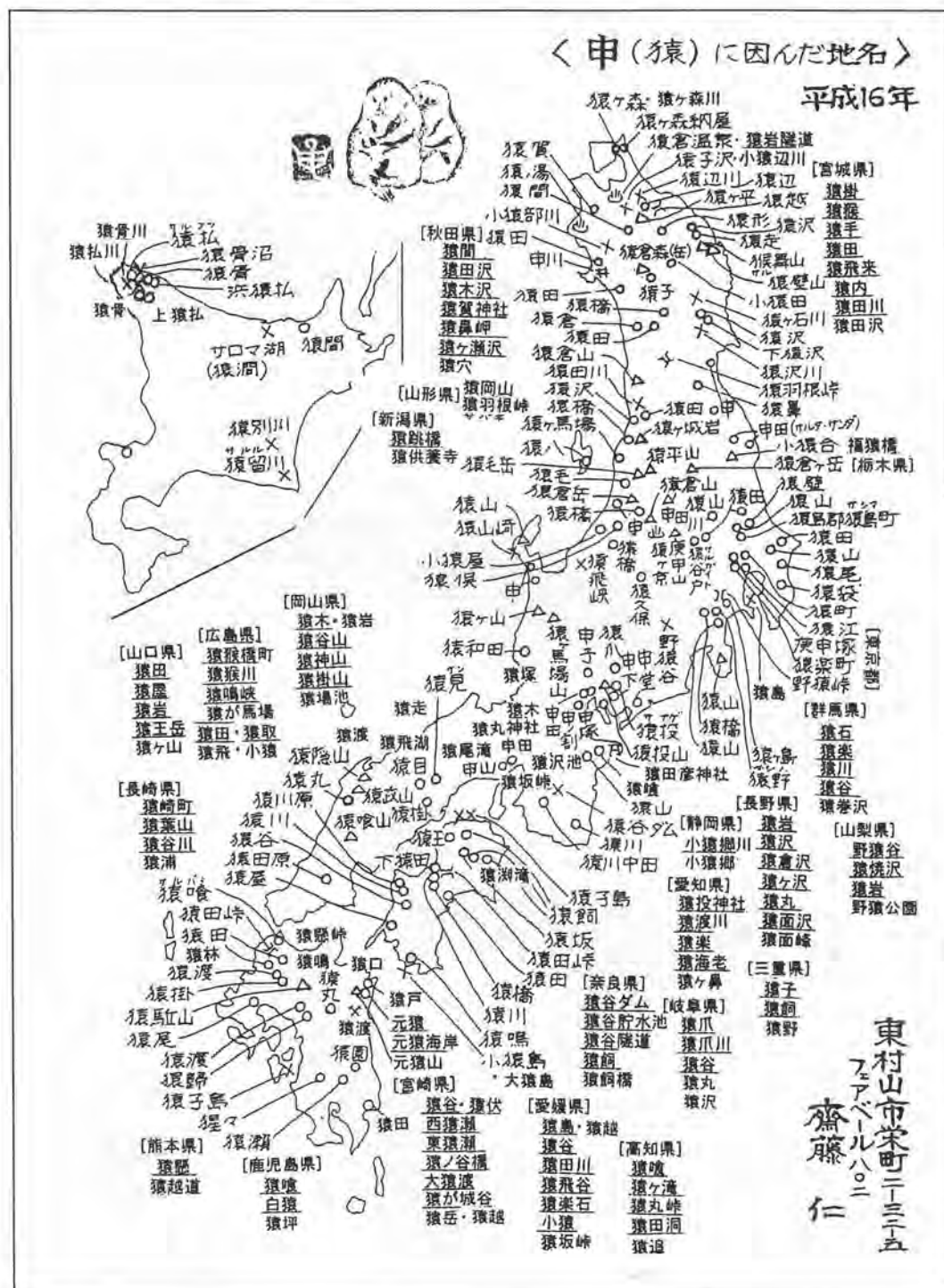
「羊皮紙に描かれた航海図」大塚英明氏(日本大学文学部教授)

今回の展示に羊皮紙の地図がある。三井文庫、東博所蔵「日本航海図」。神宮徴古館、東博所蔵「アジア航海図」にヨーロッパの「南洋鍼路図」「西洋鍼路図」など。「大日本史料」「日本関係海外史料」等多彩な史料からその時代背景と各図の特色が解説された。地図にまつわる人物として、関白秀吉、松浦侯、小野蘭山、屋代弘賢などが登場した。「伊能忠敬、間宮倫宗、そして今井信名―近世北方図の世界」

佐々木利和氏(文化庁美術学芸課主任文化財調査官)

間宮林蔵(倫宗)の弟子が今井信名(のぶかた・八九郎)で、今年没後百四十年になる。八九郎作の奥尻島、利尻・礼文島、色丹島、択捉島図が展示されている。測量技法など学んだことから地形図の書

干支を訪ねて＜甲申・こうしん、きのえさる＞





き方、色の使い方など忠敬図によく似ているという。村垣淡路守の權太探査に同行、天測指導など時代考証と地図の背景の解説がある。

展示に関して東博側の見解。これだけの地図を展示するにはこの平成館のスペースがあつて出来た。地図には派手さ、豪華さは少ないが手間のかかる展覧会でそうざらには開催出来ない。出来れば大図21枚を資料館で閲覧可能にしたい。また、地図作成の後に膨大な人々の陰の力があることを承知しておきたいと。

#### 「伊能家の歴史と忠敬」 紺野浩幸氏（佐原市伊能忠敬記念館学芸員）

生涯学習の先駆者、生涯現役を貫くとしての評価が高いが、偉人ではなく普通の人。記念館と国立公文書館に残された晩年の書によればインドの曆から仏教の立場、世界観などに反論の意思表示がある。測量日記28冊、忠敬先生日記51冊を残しているが、真情は吐露してない。

同時代に東遊雜記、西遊雜記を著した古川古松軒が五次中国地方測量日記に出ている。文化三年（一八〇六）二月二十六日は倉敷。「備中国窪屋郡水江村岡本助之丞ト云もの古松軒より伝言ニて暫時測量ノ隨身ヲ願フ、辞シテ帰ス」とある。記念館史料から幅広く忠敬像を語る。

#### 「測量と地図の過去から現在まで」 小牧和雄氏（国土地理院測地部長）

古代から中世の測量と地図は中東、ヨーロッパと中国、日本と歴史をたどる。大航海時代から近代的な測量・地図作成の始まりまで、丁寧で詳細な説明が。測地基準系の構築まで。伊能地図ではそれまでの日本図の経緯から忠敬の測量と江戸実測図の完成まで。明治政府の近代測量から現代の測量と地図までその範囲は人工衛星による地球環境監視に拡大。最新の地理情報システム、電子国土構想につながる。最後はこうあった。「測量と地図は時代の鏡」と。

□記念講演会 11月15日

「地図文化史上の伊能図」 海野一隆氏（大阪大学名誉教授）

伊能図の投影法についてサンソン・フラムステッド図法、メルカトル図法。経線、緯線の表示について当時の地図作成の先進技術探求がある。一八〇三年二月一七日に学術水準の先端をゆく至時から間重富宛の手紙がある。そこに南北の経線と東西の緯線に直線と曲線の描き方が検討されている。至時亡き後忠敬測量は間重富のお陰があり、忠敬の本には重富の功績が抜けている。つづいて話題は北方図へ移る。北海道図の作成の経緯を残存地図から探る。出羽藩岡部牧太、伊勢の奏植丸、近藤守重の地図を紹介。近藤守重のものは会員で札幌市の高木崇世芝さん所蔵と。誰が緯度を測ったのか？大図北海道に謎がある。地図の水準ではフランス図は八六四〇〇分の一だが、伊能図は三六〇〇〇分の一で優る。研究者の大事は引用などには必ず原文に当たること。磁石、望遠鏡に足が道具。観測機器の精度向上に至時、重富の努力。海野先生は大正10年のお生れ。情熱と元氣な話に感心しきり。

（福田弘行）

#### ○佐原支部から・成家淑子さん

佐原支部の研修旅行は「伊能図と日本図」特別展になりました。渡辺代表に説明をいただき、有意義な研修になりました。次年度は伊能忠敬研究会も「創立十周年」。より豊かな研修を深め、地域文化向上に役立てていきたいと存じております。

#### ○お知らせ

□伊能忠敬未公刊書状集の発刊予定

日経新聞で紹介（本号58頁）されたように、未公開の忠敬文書を安藤さん伊能さん伊藤さんが解説をすすめています。「伊能忠敬研究」別冊として刊行を予定しています。詳しくは追ってご連絡します。

□渡辺さんの「三六日間世界一周・2」は誌面都合で順延いたします。



## 伊能忠敬研究会 御案内

- 一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方にはどなたでも入会できます。
- 二、つぎのような活動をおこなっております。

### ①会報の発行

― 予定 ―

発表誌 原則として年四回 64頁

第36号 締切 2月末 発行 4月

②例会・見学会の開催

第37号 締切 5月末 発行 7月

③忠敬関連イベントの主催または共催

第38号 締切 8月末 発行 10月

④その他付帯する事業

### 三、入会方法等

入会を希望される方は、郵便振替の送金者氏名欄に住所、氏名、電話番号、FAX番号などを明記し、通信欄には専門分野、趣味分野、入会の動機、本会に対する希望など御意見を書き添えて、入金四千元、年会費六千元、合計一万円を左記にお送り下さい。

会計年度は、四月から三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度のバックナンバーをすべてお送りします。

送金先

〒162-0822 東京都新宿区下宮比町二の二八の六一八

伊能忠敬研究会

郵便振替口座 〇〇一五〇一六―〇七二八六一〇

### 投稿規定

会員は発表誌、交流誌に投稿することができます。一回の掲載は、原則として四〜八頁です。越える場合は分載します。提出原稿は返却しません。採否は編集部に一任して下さい。

一頁は二段組31字×26行、三段組20字×30行です。タイトルは五行分とします。写真、図表は大きさを考慮して下さい。

## 伊能忠敬研究会のホームページ

伊能忠敬研究会のホームページは三つあります。最新情報は大友常任理事の担当です。それぞれがリンクしています。

<http://www.2s.biglobe.ne.jp/~auto/inoh.html>

史料情報は、「資料室」として坂本幹事が担当しています。現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図などが御覧いただけます。

<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakamo/>

忠敬関係の図書、文献資料は「伊能忠敬図書館」です。前田幹事が担当です。忠敬の書斎、休憩室の史跡めぐりも是非どうぞ。

<http://www.ttiim.or.jp/~koko>

### 編集後記

◇新春を迎えみなさまの良き年を願っています。◇今号の多彩な誌面には暖かいご支援、お力添えを有難く頂戴しました。感謝します。◇昨秋は東博や江戸開府記念催事では日毎にすすむ紅葉が見事でした。◇新年は大図展の年です。ご覧に行かれるときは天眼鏡？虫めがね？があると昔の地名やこの地図の秘密に想像が膨らむでしょう。長岡さんのお知恵から。◇アーカイブという新しく難解な言葉には意味深なところがあります。記録を未来へ残すための活動というのもその範疇のようです。忠敬さんの足跡に広く繋がる事業ですね。「国立公文書館」は「ナショナルアーカイブスオブジャパン」と。◇東京のJR山手線車内では画像と文字のニュース報道などが液晶画面で見られます。日東電工の15秒スポットではいつもの几帳面な姿で忠敬さんが登場していました。◇変化への対応は幅広い意向の集約に思考の柔軟性が大事かとも。◇加賀の「伊能忠敬の落ち着き弁当」を今年の課題に。(F)

# THE INOH TADATAKA JOURNAL

STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.35 2004



## HOT NEWS

Exhibition of Large-scale Inoh Maps in U.S. Opened  
Members of Heisei Map Laboratory  
Tadataka's New Year's Cards  
"Mugaku": Kashiwagi Otowemon's Ancestor

Watanabe Ichiro 1  
Editorial Department 4  
Fujioka Takeo 8  
Sakuma Tatsuo 16

## ESSAY

Report from Harbin : As a Teacher and a Foreign Student(2)

Iwaki Hajimu 10  
Inoh Yoko 20  
Kobayashi Kiyoshi 21

## FROM VISITORS' RESISTERS

Tadataka and Sailor of Meiji

## MATERIALS

Reading Documents in "Seimonkinkyoruiroku" (2)  
Tadataka in Foreign Literature  
Meeting of Tadataka and Kanchazan  
In Conclusion of "Bicentennial year of Survey in Kaga"  
Tadataka's Chronic Disease and Eggs from Myokun

Kojima Kazuhito 22  
Akima Minoru 27  
Suganami Hiroshi 32  
Kawasaki Michiyo 34  
Sugiura Morikuni 41

## TOPICS

"400 Years From Edo to Tokyo" Memorial Lecture  
A Copy of Epitaph  
Shimenawas in New Year  
"Rinzo Festival" was Held at Ina Town, Ibaraki  
Letter Representing the Aim of Publishing Survey Maps  
List of Exhibits from Inoh Family  
Place Names having to do with Year of the Monkey

Editorial Department 19  
Ueda Koichi 26  
Otomo Masamichi 26  
Editorial Department 40  
Nikkei Simbun 58  
Memorial Museum 61  
Saito Hitoshi 63

## REGIONAL MATERIALS

Inoh Tadanori Diary (4)

Sakuma Tatsuo 50

## BRANCH REPORT

Kyusyu Branch : Inoh Map in "Nagasaki Municipal Museum"

Noda Shigeo 60  
Editorial Department 62

## MEETING ROOM

Edited and Published

by

THE INOH TADATAKA SOCIETY